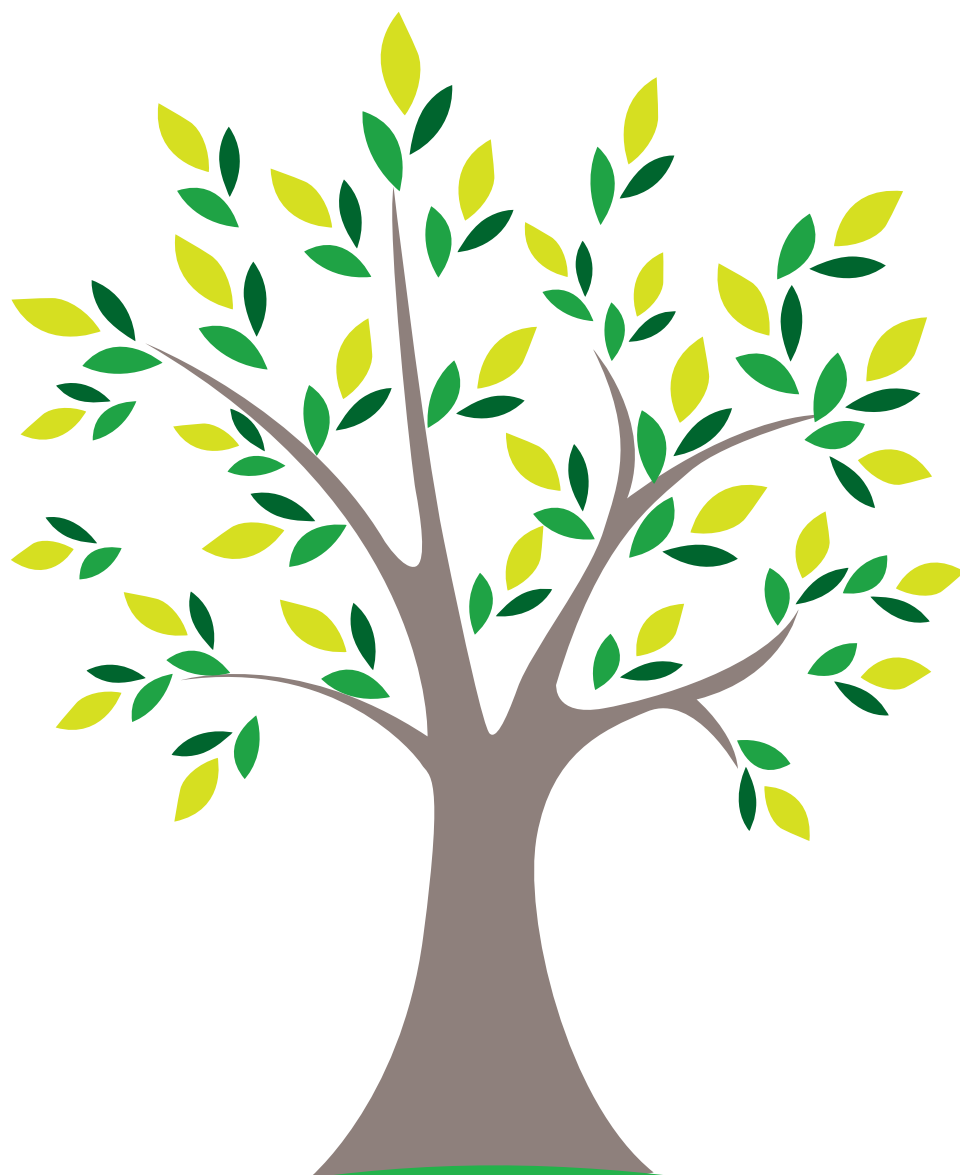


平成21年度文部科学省委託事業
「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」

「学校図書館活用ハンドブック」

学力向上のための 読書活動



はじめに

学力の向上は、日本の学校教育にとって喫緊の課題です。そのためには、いったい何をすればよいのでしょうか。連立方程式を解くためには、解き方を知っていなければなりません。解き方さえ知っていれば、連立方程式を解くことはできます。このような考え方に従えば、様々な知識や技能を体系的に身につけさせることが重要になります。それと比べれば、読書や学校図書館の活用は、学力向上にとってあまり意味がないように思えるでしょう。

しかし、学力というものの考え方は、「新しい学力観」の導入によって大きく変化しました。近年話題となった PISA 型学力や新学習指導要領における活用の重視は、その延長線上にあると考えられます。その意味で、日本の教育における学力観は 20 年近く変わっていません。ところが、学校で行われている教育がいまだにこの学力観に対応できていないように見えるのは、不思議としかいいようがありません。育てるものが変われば、育て方が変わるのは当然でしょう。

関心や意欲を育て、学び方を身につけるには、学校図書館は最適の施設です。どこの学校にもあるこの学校図書館が、十分に活用されていないのは残念でしかたありません。読書指導や学校図書館の活用方法が学校に根づいていないのであれば、その方法を広く知ってもらいたいのです。本ハンドブックは、このような思いで作りました。学校や教育委員会で、活用してくださることを切に願っています。

最後に、調査にご協力いただいた学校の皆様に心から感謝申し上げます。皆様が教育に取り組む姿にとっても勇気づけられました。

平成 22 年 3 月 研究代表者 村山 功

Contents

はじめに

目次

解説編

読書と学力ー全国学力・学習状況調査の結果からー	2
読書の意義・目的	3
担任が行う読書活動	5
家庭・地域と行う読書活動	7
学校図書館の読書行事	8
推薦図書の実成と利用	9
教科学習における活用	10
総合的な学習における活用	12

事例編

A県A町立A小学校	14
B県B町立B小学校	18
C県C市立C小学校	22
D県D市立D小学校	26
E県E町立E小学校	30
F県F市立F小学校	34
G県G町立G小学校	38
H県H市立H小学校	42
I県I市立I小学校	46
J県J町立J中学校	50
K県K市立K中学校	54
事例の調査から学んだこと	58

資料編

学校図書館の根拠	60
学校図書館の役割と仕組み	61
学校図書館担当者の役割	62
学校図書館ボランティアの導入	64
参考文献	65
用語解説	66
学校図書館・読書活動 関連団体・機関	68

索引

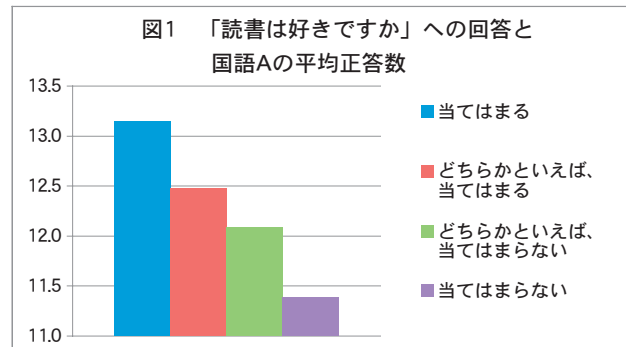
奥付

解 說 編

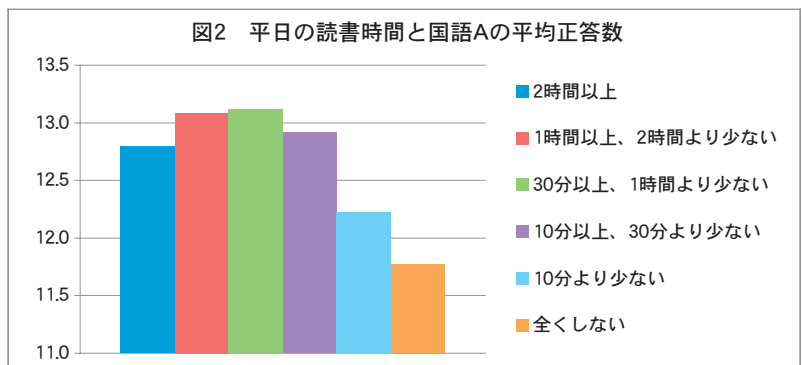
読書と学力

－全国学力・学習状況調査の結果から－

読書と教科の学力には、何か関係があるのだろうか。全国学力・学習状況調査の結果から、読書と教科の学力の関係について、おおまかな傾向がわかってきた。図1は読書が好きかという設問に対する回答と、国語Aの平均正答数との関係を示したグラフである。読書好きの子どもの方が正答数は高くなっている。



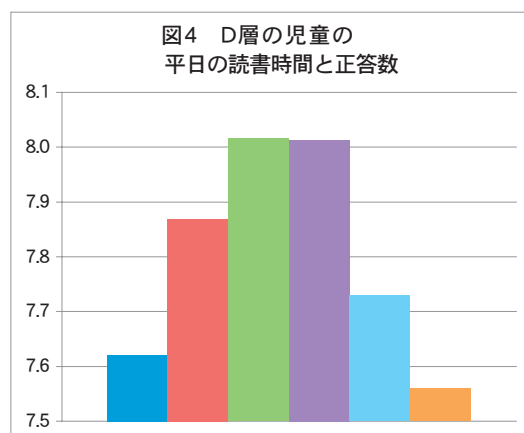
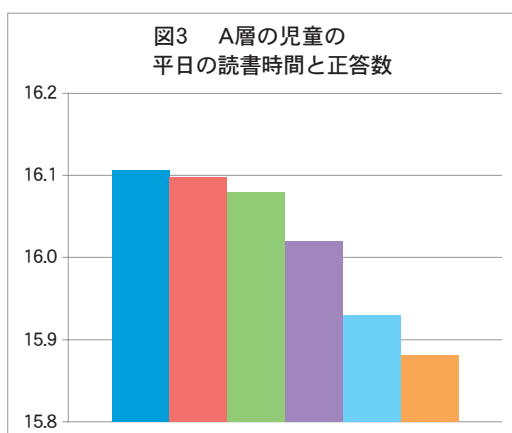
これに対し図2は、平日の読書時間と国語Aの平均正答数との関係を示したグラフである。これを見ると、読書時間が長い方が学力が高いとは言えないようだ。



そこで、このグラフを学力層に分けて見よう。図3からわかるように、A層の子どもたちでは、読書時間が長いほうが学力が高い。一方、図4を見ると、D層では逆に読書時間が長い方が学力が低い。

このことから、A層とD層では、読書の質に違いがあることが示唆される。事実、D層の子どもは長時間テレビを視聴しても、長時間テレビゲームをしても、長時間読書をして、同じように学力に悪影響があることが確認された。

これらのことから、学力向上には読書の量だけではなく、質が重要であると言えよう。



※ A～D層について

児童を正答数の大きい順に整列し、上位からA、B、C、Dの4層にほぼ等分した。

読書の意義・目的

●読書に関する法律と国民読書年

読書をめぐってはさまざまな考えがある。「読書によって人生が豊かになる」「読書は想像力をはぐくむ」と立場によって十人十色である。平成13年(2001年)には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布・施行された。また、平成17年(2005年)には「文字・活字文化振興法」が公布・施行されて、平成20年(2008年)、年齢や性別、職業等を越えて活字離れ、読書離れが進んでいる現状などを受け、国会決議により2010年を「国民読書年」に制定された。

●「活字離れ」「読書離れ」

「活字離れ」「読書離れ」が指摘されて久しくなっている。テレビが一般家庭に普及して、少年・少女向けのマンガ雑誌が刊行されて発行部数を増やした1960年代から「活字離れ」は指摘されるようになった。子どもたちがテレビ番組とマンガに熱中して読書をしなくなったことによる。

2000年以降、日本ではインターネットと携帯電話の普及によって、さらに「活字離れ」「読書離れ」が深刻になったと言われている。近年、雑誌の売れ行きは低迷して、少年・少女向けのマンガ雑誌も1980年代と比較して大幅に部数を減らしている。図書の発行点数は年間7万5千タイトルを越えているが、購買部数は微増・微減を繰り返している。

たしかに図書・雑誌の売れ行きでは厳しい状況にあるが、1ヵ月間に1冊も読まない子どもの数は減少傾向にある。つまり、子どもの「読書離れ」が解消されてきた。それは「朝の10分間読書」をはじめとする一斉読書が全国の小学校と中学校に普及したおかげで、読書をして内容を理解できたかどうかを問題としなければ、子どもたちが本を読む習慣が身についたと言えるであろう。読書調査は毎日新聞、読売新聞などで実施しているが、「活字離れ」「読書離れ」が懸念されている子どもたちよりも中高年の「読書離れ」が著しい。

●ネット情報を読むこと

「活字離れ」といっても、現在、コンピュータ植字によるオフセット印刷が一般化しているので、いわゆる活字の印刷物はきわめて少ない。印刷技術ではすでに活字から離れているが、活字文化を引き継ぐ写植技術による図書が次第に読まれなくなってきていることは事実である。アップル社のiBook、アマゾンのKindle、グーグルの「書物コンテンツの検索サービス」によって、著作をネット情報として読む時代が到来した。文字情報を図書で読むのか、ネット情報で読むかの違いについては、身体的・心理的な違いはあるかもしれない。文字情報を認識して理解するという点では、もはや図書であっても、ネット情報であっても、大きな違いは無い。

●読書の効用

それでは読書がどのような効用をもたらすのかを考えてみたい。

読書は新たな言葉、新たな知識、新たな情報を与えてくれる。今まで知らなかった言葉に出会うことができる。ここで大切なのは新しい言葉に出会ったとき言葉の意味を調べて考えなければならぬ。身近な辞書、あるいは高度な内容であれば百科事典を使って意味を確認する必要がある。

出会った言葉の意味を辞書や百科事典で確認する作業をくりかえして言葉を獲得すると、読書という作業をとおして、言葉と言葉のつながり、結びつきを考えるようになる。野矢茂樹著『論理トレーニング』(産業図書、1997)では、言葉と言葉のつながり、あるいは結びつきを「論理」

と呼んでいる。

言葉は互いに関連づけられ、より大きなまとまりを成し、ばらばらの断片から有機的な全体へと生命を与えられるのである。それゆえ、「論理的になる」とは、この関連性に敏感になり、言葉を大きなまとまりで見通す力を身につけることにほかならない。(同書, ip.)

論理的というと難しく聞こえるかもしれない。あるいは、最近「論理力」が頻繁に使われているので、「論理」の意味を深く考えないで理解されているかもしれないが、野矢氏によると、論理的とは言葉と言葉のつながり、意味と意味との結びつきを考えることである。読書によって、言葉と言葉のつながりを、文章を書いた人の考えのつながり、結びつきを、「論理的に」理解するようになる。

●ミークの読書論

教師であり、児童書の批評家である英国のマーガレット・ミーク氏の著書『読む力を育てる：マーガレット・ミークの読書教育論』（こだま・ともこ訳、柏書房、2003）は子どもの読書について示唆に富む論点を提供してくれる。ミーク氏は、現代社会のしくみが複雑化して、日常生活のあらゆる場面で文字を読むこと（リテラシー）が要求されることを指摘して、「読むことは自分の体験や学習に直接結びつくもの、そして将来の自分に必ず役に立つもの」（同書, p.12）としている。

ミーク氏は、良き読者が「実用的な知識を得」るだけでなく、「幅広く奥深い人間の経験を読み取ることができる」と指摘して、「人は本を読むことによって、精神の世界に住むことができる」（同書, p.30）とも述べている。「読書は想像力を高める」といわれる。文字の連なりを見ただけでは場面の光景は思い浮かばない。想像力を導くためには、言葉の意味と読み手の経験した光景を結びつける必要がある。想像力を高めるときも、言葉と経験、光景を結びつける論理力が関わっているとと言える。

●人とつながりを生む読書

作家の平野啓一郎氏は『本の読み方：スロー・リーディングの実践』（PHP 研究所、2006）で、遅く読みながら質を高める読書の手法を紹介しているが、「読書は、コミュニケーションの準備である」（同書, p.38）と述べている。読書をとおして、作者と読者の対話があり、読者と読者、あるいは未だ読んでいない者との会話へとつながる。読書によって、作者の言葉、考えを借りながら、自分の思いを他の人へ伝える準備ができると平野氏は述べている。

●言葉と言葉、想いと想い、人と人を結ぶ読書

読書によって読み手の中では言葉と言葉、事象と事象、意味と意味を結ぶ論理的理解を作り出す。読書は作者と読者の間で対話を生み、想いと想いを交換することができる。さらに著書を読んだ者が互いに感想を伝え合い、また読んでいない者にも紹介する機会を作る。読書はさまざまな意味でつながりと結びつきをつくる。

担任が行う読書活動

全国学校図書館協議会と毎日新聞社とが共同で、毎年行っている学校読書調査をみると、本を手にとったきっかけとして「担任の先生からすすめられて」を選択した回答が目をひく。また低学年時の教師からの読み聞かせ経験については、「好きだった」「どちらかといえば好きだった」との回答が8割前後にも達している。

小学生や中学生にとって、担任は自分を理解してくれる特別な存在である。その特別な存在である担任が行う読書活動は、前述したように大きな教育効果を発揮する。本項では、担任が行う読書活動を例示したい。参考にぜひ実践していただきたい。

学級集団に対して

●朝の会・帰りの会、ホームルームの活用 p.20

短時間でも毎日ある短学活の時間は、担任としての「お薦め本」を紹介する最適な時間である。使える時間に合わせて、書名のみで紹介にしたりあるいはあらすじを話したり、「先生がこの本を好きな訳は…」とお薦めの理由を伝えたりと、パターンはいろいろである。例えば担任が、土曜日・日曜日に読んだ本ということで、毎週月曜日に定期的に位置づけることもできる。また、月曜日は担任で、火曜日から金曜日は児童生徒が輪番制で本の紹介をするのも広がりが見られる。

絵本や短編なら、10分あれば読み聞かせができる。読み聞かせは、小学校の低学年向けの活動であるという固定観念をもっている教員がいるが、決してそうではない。はじめは「読み聞かせなんて」という態度を見せる中学生も、回を重ねるうちにその時間を心待ちにするようになるという話を、実践している方から聞く。絵本は、現在、絵・内容ともにすばらしい、大人まで楽しめるものが多数出版されている。絵本の読み聞かせは、文字数の多い本は苦手な子たちにとっても、本に親しむ好機となるだろう。

●道徳、特別活動の時間の活用

道徳や特別活動は、ほとんどの学校で担任が指導する時間になっているので、担任として読書活動に取り組める貴重な時間である。

学習指導要領の道徳における指導にあたっての配慮事項の中に、「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用」が掲げられている。学校図書館は、魅力的な教材となる図書宝库である。伝記を読むことを通して生き方を考えたり、環境問題の最新の情報を題材に、地球に対して自分たちができることは何かを話し合ったりなど、教科学習とは違った視点での展開ができる。

最近、異年齢集団による読み聞かせや、福祉施設などへの読み聞かせの活動を特別活動の時間に取り入れている学校が増えてきている。少子化・高齢化がすすむ中で、読み聞かせの活動を通して他者への思いやりの心やコミュニケーション能力を育むことを意図しているのだろう。担任として、まずは場の設定を考え、次の段階として選書の相談にのり、さらに練習の時間を確保するといった流れで実践化をはかりたい。

ひとりひとりの児童生徒に対して

●興味関心にあわせた読書指導

読書をしない児童生徒は、「読みたい本が見つからない」「ほかにやりたいことがある」を理由としてあげることが多い。いずれの理由も、児童生徒が長時間過ごす学校生活の中で一番向き合う時間の多い担任が、ひとりひとりの興味関心を把握したうえでその興味関心に関わる本を薦めると、「先生が自分を見つめていてくれた」との驚きとともにその本を手にとってくれることがある。

「ほかにやりたいこと」が、野球やサッカーなどのスポーツの場合、上達法の本や現在活躍している選手のことが書かれている本を薦める。ゲームに時間を割いている子には、ゲームを題材とした本を薦める。「読みたい本が見つからない」子のために、持ち寄り学級文庫という方法もある。お薦めの短いコメントを添付し、学級の手にとりやすい場所に置く。担任は率先して入れるようにする。同じ趣味をもっているクラス仲間が薦める本には、おおいに興味を抱くことだろう。

●読書の実態にあわせた読書指導

児童生徒の家庭における読書環境は、実にさまざまである。乳幼児期に十分な読み聞かせをしてもらい、本のおもしろさを実感して好んで読書をする子。家庭に本が一冊もなく、新聞も購読せずといった家庭で幼児期を過ごし、本の楽しさを味わわずに入学した子。学校生活のスタートラインから読書の実態に大きな格差が生じているのが現実である。担任はそのような状況を把握したうえで、スタート時点からの読書実態の格差是正に努めたい。「読む」力は、あらゆる学習の基盤となるものなのだから、教育の場である学校での読書指導は不可欠のものである。

低学年の間は好んで読書していた児童も、学年が進むにつれ本から離れていくことがある。「もっと文字の多い本を読みなさい」といわれたことが本離れの原因になることもある。担任としては、読書ノートといった読書記録に目を通し、常に読書の実態の把握に努めたい。

保護者会での話題のひとつに読書を取りあげ、実態を話しながら担任としての読書への思いを伝えるのも有効な方法といえる。

●学校図書館と連携して本の情報を得る

今まで述べてきたことを実践するためには、担任が本についての豊富な情報をもたなくてはならない。さまざまなメディアが、新刊情報を流したり本の紹介特集を組んだりしており、日頃からそのような記事に目を向けたい。

しかし、すでに出版されている本や日々出版され続けている本の膨大な量の情報を、ひとりで把握するのは困難である。ぜひ司書教諭や学校司書の力を借りたい。担任として展開したい読書活動の意図とともに、児童生徒の読書実態を伝えれば、学校図書館蔵書のみならず、公共図書館からの借り受け手配もしてくれるだろう。司書教諭や学校司書が自らブックトークを実施してくれるかもしれない。ぜひ学級担任としての読書活動の充実を目指したい。

家庭・地域と行う読書活動

●家庭で一緒に読む 事例 p.44, p.49

子どもが読書に興味を持つためには、家庭で親が本を読む姿を見せることが大切である。もちろん本だけに限らない。新聞や雑誌でもよい。子どもが読書に興味を持ち始めたら、前述したマーガレット・ミークは著書で、学校に通う前の5歳以前の子どもに対して親が「単に子どもにページをめくらせながら、一緒に読めばいいだけのことなのだ」(p.55)と述べている。さらに「本を読むこととはどういうことかを、大人と子どもが共に学んでいくこと」(p.57)が大切であるとも述べている。

●読書の時間

子どもに読書を勧めるために、家庭でテレビやインターネットなどの情報機器を使わないようにするという意見もある。しかし、落ち着いて本を読むために、家庭で日々刻々と変化する社会の情報を全く遮断することは現実的ではない。反対にテレビのニュース・ドラマやインターネットの情報がきっかけとなって、読書に興味を持つことも多い。そこで、テレビやインターネットなどの情報機器を使う時間と読書する時間のバランスを適度に保つことが大切になってくる。

学校だけでなく、家庭での読書活動の大切さについて、ミークは学校に通う7歳児の保護者に向けて「家庭こそが子どもを全人格として見られる場所であり、子どもの暮らしのどの部分に読書を入れたらよいかは親が一番よく知っていることを忘れないでいただきたい」と述べている。

●地域の図書館との協力 事例 p.36

学校図書館の蔵書数が「学校図書館図書標準」を達成したとしても、学校図書館の図書だけで子どもの旺盛な読書欲と知識欲を満たすことはむずかしい。そこで地域の公共図書館に依頼して、団体貸出で必要な図書を借りる。また、通学圏に公共図書館がない場合は、学校を移動図書館のステーション（停車拠点）にして、週1回程度巡回してもらおう。そのほか、公共図書館と近隣の学校図書館がネットワークを結んで、巡回配送車を走らせて、学校図書館と学校図書館との間でも相互に図書の貸し借りをすることもできる。

地域の公共図書館や近隣の学校図書館とネットワークを形づくる場合に心がけたいのは、多くの図書を借りられることに安心して、年間の資料費を削らないことである。学校での読書活動、学習活動に確実に必要な図書資料は、年間の資料費で購入して、学校図書館の蔵書をつくりあげていく必要がある。

●地域のボランティアの受け入れ 事例 p.17

子どもが読書に興味を持つきっかけを与えるには、紙芝居、ストーリーテリング、読み聞かせなどがあるが、学校の教職員、家庭の保護者だけでは行き届かないこともある。その場合は、地域のボランティアに依頼して読み聞かせなどを行う。もちろん、紙芝居、ストーリーテリング、読み聞かせは、教職員と保護者も実践してかかわることが大切である。

●ブックトークとブックリスト

子どもに図書を紹介するブックトークを行うときに、地域の公共図書館の児童サービス担当者に依頼することもありうる。また読書活動、学習活動に必要な図書のリストの作成にあたっては、児童サービス担当者に相談することも必要になるであろう。

学校図書館の読書行事

●意義

全校生に等しく読書の楽しさを体験してもらうためには、例えば、学校図書館部が中心になって運営する読書行事が大切である。またこういった行事を行うことは、全教職員の協力が必要であることから、教職員の読書に対する意識の改革にもつながる。

実施にあたっては、年度当初の職員会議に提案する学校図書館活動年間計画に位置づけをはかり、教職員の理解を得る。次に実施日が近づいてきた段階で学校図書館部などの場で、細部にわたって検討し、職員会議に提案するという手順をふみたい。この計画の段階ですでに教職員への意識化の観点から意義深いものになっている。

実施後は必ず反省・評価を行い、次回の改善につなげたい。繰り返し実施しているうちに積極的に協力する教員が増え、アイデアも寄せられるようになる。

●効果的な各種記念日に合わせての実施

・子ども読書の日〈4月23日〉

「子どもの読書活動の推進に関する法律」によって、「子ども読書の日」と定められた日。スペインのカタルーニャ地方では本をプレゼントしあう習わしがある、「サン・ジョルディの日」である。また各都道府県や市町村、公共図書館でもさまざまな催しが行われる日であり、小学校では学校図書館の読書行事がよく実施されている。

・学校図書館の日〈6月11日〉

1997年6月11日に学校図書館法が改正され、司書教諭の配置が義務づけられたことを記念して、社団法人全国学校図書館協議会が定めた。学校図書館の存在意義などを児童生徒に話し、豊富な蔵書のある図書館の活用について考えさせたい。

・文字・活字文化の日〈10月27日〉

「国民の間に広く文字・活字文化についての関心と理解を深めるようにする」ことを目的として、「文字・活字文化振興法」に定められた日。諸団体によって行事が開催されている。児童生徒に文字・活字文化について考えさせるのに適した日である。

・読書週間〈10月27日～11月9日〉

平成22年の読書週間が第64回目となり、大変長い歴史をもつ。良書の普及と読書の推進のために全国各地でボランティア団体も含め催しが行われる。読書週間にあわせて読書行事を計画する学校図書館は、大変多い。古来から「灯火親しむ侯」といわれるように、全校あげて読書に親しむ最適な季節である。

●読書行事の例 事例 p.16, p.52

・全校集会

体育館などに全校生が集まり、大型絵本で読み聞かせを聞いたり、読書クイズを楽しむ。学校長や図書委員会の児童生徒、ボランティアの活躍の場でもある。

・全校一斉読み聞かせ（「ブックフェア」とよんでいる学校も）

一定の時間に教職員全員が図書館、教室、ホールなどで一斉に読み聞かせをする。事前には読み聞かせの書名と場所だけを伝え、どの先生が読むかはお楽しみという方法が多いようである。最近、実施校が増加している行事である。

事例の詳細については、本書15ページからの「事例編」を参考にしていきたい。

推薦図書の作成と利用

●推薦図書とは

推薦図書は、児童生徒が本を選ぶときの参考資料や読書指導のために、一定の基準又は価値判断によって選定した図書をいう。多くは図書名、著者名、出版社名、所在記号(請求記号)等を記載したリストにする。

担任や学校図書館担当者が推薦図書を選定・作成する観点には、次のようなものがある。いずれも読書指導のために作成される。

- ・是非児童生徒に読ませたい不朽の価値を有する名作・古典、評価の定まった現代の作品
- ・系統的な読書指導のために発達段階に即して選定した作品
- ・教科の発展学習、発展読書のために単元・教材ごとに選定した作品
- ・教師、保護者が読んで感動したり、心に残る作品

推薦図書は、教師又は学校図書館、読書推進や学校図書館振興の団体がそれぞれの目的によって作成しているが、近年では読書活動として児童生徒が作る例も多くなっている。

●推薦図書リストの作成

・目的の明確化

作成の目的を明確にし、それに適した本を選定する。

・実態、現状の把握

児童生徒の読書歴、読書傾向、読書への態度、学校図書館の蔵書の現状、冊数等をできるだけ正確に把握しておく。

●作成手順

- ① 原則として学校図書館の蔵書の中から選定する。作成は、学校図書館担当者だけが行うのではなく、できるだけ多くの教職員がかかわるようにする。
- ② 目的に合う本を選定するために、参考となる各種の図書目録を集める。目録には、出版された本を網羅的に集めたものと一定の基準で選定したものとがあるが、両者を参考にするとうい。
- ③ 児童生徒の興味・関心の幅が広がっている現状を踏まえ、特定の分野に偏らないように選定する。学年別に作成する場合には、本の難易度を考慮し、すぐに読み切れるやさしいものから、ページ数が多く内容が高度なものなどを選ぶようにする。小学校の場合には、1学年ごとではなく、2学年ごとに作成することもある。
- ④ リストには、少なくとも次の書誌事項を記載する。本を探すときに所在記号(請求記号)を利用するように必ず入れる。必要に応じてシリーズ名も入れる。本の難易度を☆の数で表したりする工夫をする例もある。

書名 著者名 出版社名 所在記号(請求記号)

●推薦図書リストの利用

事例

p.24, p.32, p.44, p.48

推薦図書リストの利用には、リストの本を全て読ませる方法とリストの中から児童生徒が選んで読む方法がある。全て読ませる利用法では、他の子と比較して競争心のみをあおるようなことは避け、達成感を味わえるように配慮する。保護者にもリストを渡し、家庭で共に読むことも推奨することも広く行われている。

教科学習における活用

●学校図書館の活用

長い間、学校図書館は読書活動のための本を所蔵するところ、という認識が持たれていた。教員の間でもこのような認識は一般的であり、教科学習では国語科の発展読書に利用する程度であった。しかし、学校図書館法における学校図書館の目的は、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成すること」と規定するように、学習指導の支援も目的の一つに掲げられている。

教科の学習は、教科書を中心に行われるが、副読本、資料集等も利用される。学校図書館も同様に教科の学習を資料面において支援する「学習センター」としての機能を持つ。とりわけ、探究型学習が指向されている今日では、学校図書館の機能を活用しないで効果をあげることは困難とされている。限られた時間で行われる日々の学習活動では、体験、実験、実習、観察にそれほど時間を割くことはできない。そこで、どうしても二次資料を利用せざるを得ず、二次資料を豊富に持つ学校図書館の利用が欠かせないものとなる。

●環境の整備

教科学習に活用するためには、学校図書館そのものが利用できるように整っていないと行けない。少なくとも、次の条件を満たしていなければ、十分な効果は期待できない。

- ・登校時刻から下校時刻まで、鍵をかけずに開館している。
- ・日本十進分類法（NDC）等によって分類され、所在記号を書いたラベルが貼ってある。
- ・本の背には、所在記号以外のラベル等を貼っていない。（禁帯出等は除く）
- ・書架の棚の左から右に、分類記号順に配架している。
- ・書架に、配架している本の分類が分かる表示がある。
- ・内容が古く、誤った情報を与えるような本が書架上にない。

これらの条件を満たしていないと、本を必要なときに探すことがなかなかできず、また探し当てたとしても古い本のために学習活動には適さないものとなる。

●活用するための知識・技能

事例 [p.17, p.37](#)

学校図書館を使うためには、学校図書館の利用に関する基礎知識や技能が必要となる。これらは利用指導として各担任が計画的に指導することになっている。最小限、次の項目は小学生段階から発達段階に応じて体系的、計画的に指導していきたい。

- ・学校図書館の役割
- ・分類の仕組みと意義
- ・所在記号の仕組みと配架の方法
- ・目次、索引の利用
- ・本の奥付の意味と利用

●学校図書館の活用場面

事例 [p.52, p.56](#)

学校図書館を活用する場面には、次のようなものがある。複数を同時に行うこともある。

動機付け

単元の導入や日々の授業の始めに、学習内容に関連し児童生徒の興味・関心を引くような図書を紹介したり、事前に1冊の本を読ませたりする。時事的な話題、マスコミ等で報道された内

容に関連することを紹介することもある。

課 題

課題を設定するとき参考となる資料を提供したり、本を紹介したりする。前年の児童生徒の作品、成果物も大きな刺激を与え、参考やヒントにもなる。

補 完

実験、観察だけではその時の諸条件によって十分な成果が得られない場合には、不足する箇所を本、写真、DVD等で補う。

補 強

教科書の記載内容だけでは少なすぎたり、省略されたりしていて、理解がなかなか深まらないときに資料で付け加えたり、児童生徒がみずから調べたりする。

比 較

一つの事象を他と比較させることにより理解が深まったり、興味・関心を引いたりする。日本と外国、現在と過去、使用前と使用後等を比較し、異なることを明確にし、考える資料やヒントとなる。

検 証

課題を解決したときに、それが本当に正しいのか、不十分なところはないか、他に解決法がないのかなどを資料等で検討する。

触 発

本を読んだり、資料を見たりすることによって触発されることがある。特に前年度の児童生徒の作品、成果物を見ると、身近な人のものであり同年齢の子のものであるので、これに触発され、さらによいものが出来たりする。

模 倣

学ぶは真似ることから始まる、と言われる。まずは真似ることから始め、それからオリジナリティーがでてくる。資料や前年度の成果物を模倣し、模倣から高次のものに引き上げるのが教師の役目である。

発展・深化

教科書での学習により基礎や基本を学んだ後、各自の興味・関心、能力に応じて学習を発展させたり、深化したりする。学年の枠を越えることもあるが、各自の興味・関心によって行われるので、生きる力となる大事な学びとなる。

伝 達

作品、成果物を他に知らせる。そのためには論理が通り、他に分かる表現をしなければならない。誤解されないように表現に工夫をこらし、表現力、コミュニケーション能力も育まれる。

共 有

学習の成果を共有することにより、各自の学習だけでは不十分になりがちなものが、より広く深いものとなる。

保 存

作品・成果物を学校図書館が保存し提供する。児童生徒にとっては学習のよい素材、資料、手本となり、教師にとっては教材研究の資料であり、次年度の教育課程の編成、各時間の授業設計の参考となる。

総合的な学習における活用

●ゆとりをつくる総合的な学習

2003年から始まった「総合的な学習の時間」では、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。具体的には社会科の日本の地理で学ぶ気候と理科で学ぶ気象現象を、大きなテーマに結びつけて学ぶことで、異なる教科で重複して学ぶ時間を短縮でき、子どもが自ら疑問を持ち、問題を解決して、さらには発表してコミュニケーションを図ることが総合的な学習の目的である。総合的な学習は、重複する教科の内容を横断的に学ぶことで時間的にも心理的にもゆとりをつくる。その上、総合的な学習は教科の枠を超えて、発展的に学習を進める。

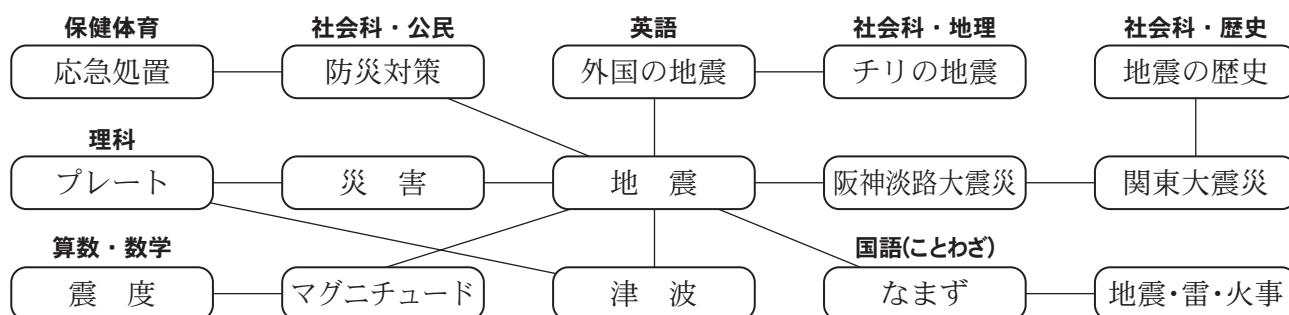
●知識の本を読む 事例 p.57

前述したマーガレット・ミークは著書で「地理学や科学は、本からでなく、自分の目で見て調べることによって本物の学習が始まるということ覚えておかなければならない。(中略)たいていはその新しいものに興味を持ったあとで、本がさらに広げ、深めてくれる。」(p.198-199)と述べている。ミークは、図鑑、統計資料など視覚的で図式化された情報を調べることで興味を持って、読み物などの文字情報でさらに思考を深めると解説している。

●大きなテーマから個別な学習へ 事例 p.32

例えば「地震」という大きなテーマを取り上げて、個別な学習に取り組む時、ブレインストーミング(少人数・短時間で自由に発想を提案する方法)で発想を広げて、コンセプトマッピング(引き出した発想をキーワードにして図式化する方法)で概念図を描く。

概念図の例



子どもは、それぞれのテーマの図書を読み、DVD-ROMの百科事典・図鑑、インターネットの情報を活用して、発表に必要な文章と語句、図式、グラフをメモに書きとり、レポート・口頭発表の原稿にまとめる。子どもの興味に応じた読書をすることで、テーマについての理解を深められて、思考を発展させることができる。

●実生活への応用力

今日の社会生活は複雑化して、あらゆる情報を読み取る力を要求している。電化製品を使う場合も説明書を読み、道を歩くときにも道路標識を読み、電車に乗るときにも、路線図を読む。総合的な学習で養う読解力は実生活への第一歩となるであろう。



事



例



編

今回の調査にご協力いただいた学校

平成18、19年度文部科学省委託研究「新教育システム開発プログラム」の「学校図書館の充実に関する調査」協力校として、学校図書館の図書資料の充実を図るとともに蔵書を活用した読書活動・学習活動に取り組んだ学校のうち、全国学力・学習状況調査において、平均正答率が向上した、読書時間が増えたなどの結果を示した学校を選んだ。

【全国学力・学習状況調査の結果を活用し、以下の条件の下で学校を選定】

- ①国語Bの平成21年度と19年度の平均正答数の差が、それぞれの年度の全国平均(公立学校)の差より大きいこと
- ②「家や図書館で、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか。」(本ハンドブックにおいては、「平日の読書時間」と標記。)という質問において、10分以上読書をする回答した児童生徒の割合の平成21年度と19年度の差が、それぞれの年度の全国平均(公立学校)の差より大きいこと
- ③平成21年度において、②の質問に対して、10分以上読書をする回答した児童生徒の割合が、全国平均(公立学校)より大きいこと
- ④「昼休みや放課後、学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか。」(平成21年度のみ)(本ハンドブックにおいては、「図書館利用頻度」と標記。)という質問において、月に1回以上行くと回答した児童生徒の割合が、全国平均(公立学校)より大きいこと

A県A町立A小学校 読みを広げる、深める指導の工夫

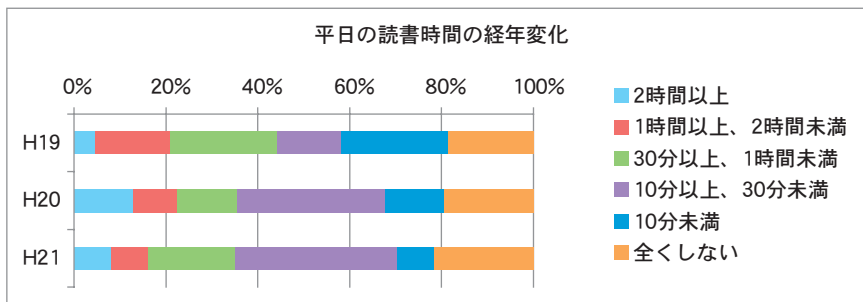
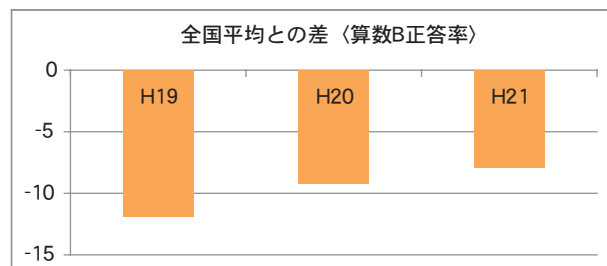
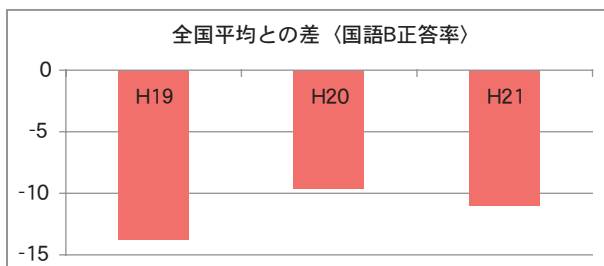
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	1学級
第2学年	1学級
第3学年	1学級
第4学年	1学級
第5学年	1学級
第6学年	1学級
特別支援学級	5学級
全児童数	約200名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	14名
養護教諭	1名
栄養教諭	1名
事務官	1名
支援員	1名
公務生	1名
給食配膳	1名

学校図書館の概要

蔵書冊数	8,343冊 (2010年2月16日現在)
図書標準達成率	99.8%
年間図書費	118,000円
年間貸出数	2,509冊 (平成20年度) 一人当たり貸出数 11.5冊
組織	
司書教諭	20年度まで有、21年度は無
学校司書	有(町内の学校を巡回)
ボランティア	有
担当分掌名	図書館担当
図書館主任	無
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- 教科の平均正答率の全国平均との差が縮まっている
- 10分以上読書をする児童の割合が増加

読書に関する取り組み

- ・朝読書で読書の習慣化をはかる
- ・季節ごとの読書行事で読書の意欲を高める
子ども読書の日「ストーリーテリング」(本を持たず、聞き手に向かい昔話や短い話を聞く)
秋の読書週間「先生のおすすめの本の紹介」・「読書ゆうびんコンテスト」
12月の図書まつり「ブラックライト紙芝居」
- ・図書委員会によるおすすめの本の紹介
- ・読書感想文の書き方指導とコンクールへの応募
- ・図書館だよりの発行

学力向上に関する取り組み

- ・調べ学習の基礎となる授業を、司書教諭や担任が計画的に実施している。
- ・そこでつけた力を、教科学習の中や総合的な学習の時間での調べ学習に生かしている。
- ・調べ学習を、各教科の年間指導計画に位置付けている。
- ・調べ学習に活用できる参考図書一覧を作成し、担任に提供している。
- ・学校教育目標と学校図書館教育全体計画との関連がはかられている。



担任による要約の授業（4年）

読書と学力との関係についての考え方

- ・朝読書の効果として、読書量の増加や読解力の向上を実感している。
- ・朝から集中して学習に取り組む姿勢作りに貢献していると考える。
- ・「読む」ことはすべての学習の基本をなすものであるから、「読み解く」ことができればテストで測れる学力の向上は、十分考えられる。
- ・知識を読書によって得ることで、好奇心や興味が広がり「見えない学力」「学力の根幹を成すもの」を育てると考える。
- ・小説などの物語であっても、読書することで想像力を働かせることは脳を活性化させて、他の学習についても必要な想像力をつけている。

読書ゆうびんで、読書の楽しさを広げる

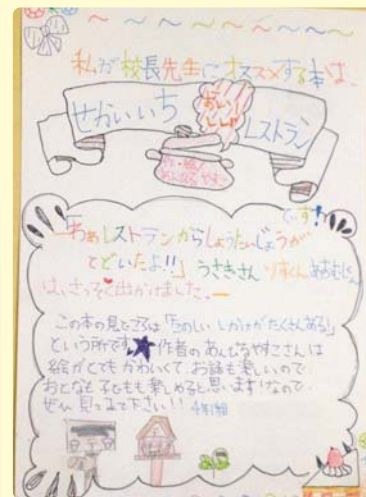
秋の読書週間にあわせて実施

◆ 読書ゆうびんの方法

- ①お気に入りの本やおもしろいからぜひ読んでほしい本など、本の紹介をはがきを書く。
- ②おくりたい人のあてさきを書いて、ポストに入れる。
- ③図書委員が、はがきを集めて配達する。

◆ 読書ゆうびんコンテストの方法

- ①図書館前から「読書ゆうびんコンテスト」の用紙をもってくる。
- ②全校のみんなあてでも、友だちあてでもよいので、おすすめの本の紹介を絵やイラストなどを入れて作品を作る。
- ③図書館前の応募箱に作品を入れる。



読みを深める読書感想文の指導

「読んで世界を広げる、書いて世界をつくる」ために

青少年全国読書感想文コンクールのキャッチフレーズから

◆ 目的

- ・文章に表現することによって、漠然と感じていた本に対する感動をもう一度確認することができる。
 - ・主人公や登場人物と自分、著者と自分というように、他者を理解し自分を振り返ることで、自分の世界を他者へと広げてゆくことができる。
- ◎「読書感想文くらい書ける力」を子どもにつけたい！

◆ 読書感想文指導のヒント

全職員に資料として配布し、取り組みをうながしている。

- ① 読書感想文とは
- ② なぜ、読書感想文を書くのか
- ③ 上手な読書感想文とよい読書感想文
- ④ 本選び
- ⑤ 書かせ方のヒント

全校体制で取り組む読み聞かせ

様々な読書体験を通して、児童の読書意欲を盛んにし、豊かな心を育む

◆ 先生たちのドキドキ読み聞かせ

- ・ 同一時間に一齐に
 - ・ 教室や図書館などの読み聞かせの場所に2名の先生
 - ・ 読み聞かせの他に、本に関するクイズや手遊び歌、他の本の紹介もOK
- ☆読み聞かせの場所に行って初めて何先生かわかる…ドキドキワクワク

◆ 子ども読み聞かせ

- ・ 6年生が1年生に、5年生が3年生に、4年生が2年生に
- ・ グループのペアは、該当学年で事前に相談
- ・ 本は、読み聞かせる子どもたちが事前に選んでおく

◆ 地域の方の読み聞かせ

- ・ PTA図書部のお母さん達や図書ボランティアによる
- ・ 読み聞かせと「ブラックライト紙芝居」（黒字のパネルを使うパネルシアター）
「ブラックライト紙芝居」は…
 - ① 絵本を選ぶ…暗闇で光らせたときに効果的に見える絵本
 - ② 出版社に著作権の許諾をとる。
 - ③ 絵を描く
 - ④ 色を塗る…色を混ぜてはライトで照らし、調整する作業を繰り返して。

魅力的な空間づくり

◆ 本にひきつけるテーマ展示

ねこ好きにはたまらない 2月22日はねこの日
こんな本はいかが！

『あおい目のこねこ』福音館書店

『にゃんにゃん探偵団』偕成社

『ネコとひなたぼっこ まどみちお詩集』理論社 ほか

◆ 本をさがしやすい配架の工夫

- ・ 正しく整理された書架
- ・ NDCにもとづいた見出し版の設置

◆ くつろぎのコーナー

- ・ ぺたんと座ったり、寝ころんだり…
- ・ 昼休みに大にぎわい

～思い思いのスタイルで
読書を楽しむ子ども達～



くつろぎのコーナー



テーマ展示『2月22日はねこの日』



本をさがしやすい手作りの見出し版

B県B町立B小学校 読書活動で主体的に学ぶ子を育てる

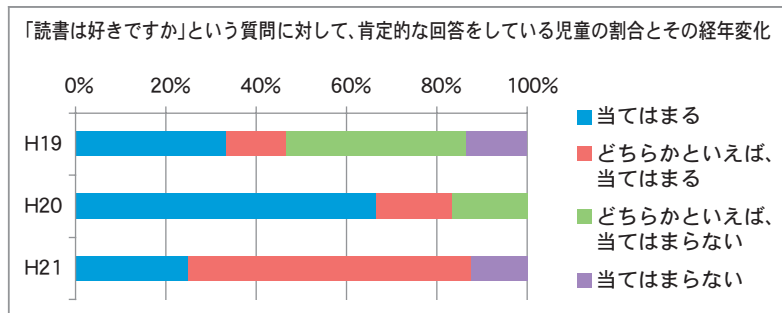
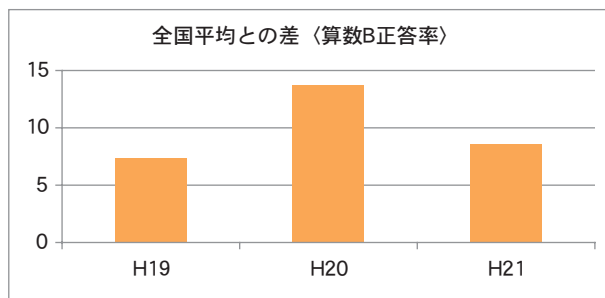
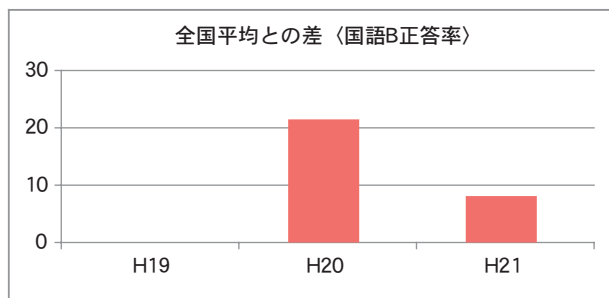
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	1学級
第2学年	1学級
第3学年	1学級
第4学年	1学級
第5学年	1学級
第6学年	1学級
特別支援	2学級
全児童数	約70名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	10名
養護教諭	1名
臨時事務職員	1名
支援員	1名
用務員	1名

学校図書館の概要

蔵書冊数	6,856冊
図書標準達成率	113%
年間図書費	100,000円
年間貸出数	3,663冊
組織	
司書教諭	無
学校司書	無
ボランティア	有
担当分掌名	学校図書館
図書館主任	有
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



・「読書は好きですか」の質問に肯定的な回答をする児童の割合が増加

注) 小規模校のため、年度ごとの変動が大きい

読書に関する取り組み

- ・「朝の読書タイム」で全員が読書
- ・担任以外の教職員による「ブックトーク&読み聞かせ会」の実施
- ・担任が読んだ本、今読んでいる本を紹介する「3分ライブラリー」の実施
- ・挿絵と感想による「絵日記」づくり
- ・読書感想文・読書感想画指導の実施
- ・読み聞かせ、ブックトークの実施
- ・「親子読書」の推進

学力向上に関する取り組み

- ・授業の前に、中に、後に、生活の中に本と出会让せる。
- ・豊かな体験と表現の場を設定する。
- ・学び方指導の体系を作り、計画的に指導する。
- ・目的に合った本の読み方(詳しい読み、複数の本の比較読み、本の特性に応じた読みなど)で情報活用能力育成指導を実践する。



読書と学力との関係についての考え方

- ・知識量を測る学力にとどまらず、知識・技術を学ぶ方法(学び方)を習得する力を「学びの力」ととらえる。
- ・読書によって、低学年は集中力が高まり、高学年では表現力と精神面が成長することにより、学習への積極性が出て学力も身についていく。
- ・学力は、読書量・読書の質・読み方の相乗効果によって高まるものであり、読書量だけが増えただけでは効果は少ない。

読書への興味・関心を高める指導

◆ 読書習慣の形成と本にふれる機会を増やす

朝の読書タイムの実施

家庭における読書の奨励

読み聞かせ会の実施(高学年が低学年に、図書ボランティアが児童に)

◆ 国語科の授業における取り組み

読書へのアニメーション^{*}の手法を取り入れた実践

絵本からクイズを作る活動

(^{*}読書へのアニメーション

スペインのモンセラット・サルトラが開発した、ゲームを通して本を読む力を引き出す読書指導法)

◆ 国語科以外の教科による図書の活用

図画工作科における読書感想画の指導

音楽科における本からのイメージを広げる活動

子どもと本の出合わせ方

◆ 「3分ライブラリー」(担任 → 児童)

朝・帰りの短学活、国語の時間等に担任が今読んでいる本、読んできた本を紹介する。

◆ 「読書タイム」(児童 → 児童)

本の紹介カードを書く。(月曜)

◆ 「お話タイム」(児童 → 児童)

児童が今読んでいる本、読んできた本を紹介する。
4人の友だちに本を紹介する。(火～金曜)

◆ 各教科の中で

児童の実態、学習のテーマに適する本を紹介する。
各単元に関連する本を紹介する。

教室内に特設コーナーを設け、単元に関する本を配置する。

各単元に関する「図書リスト」を作成し、それをもとに利用する。

公共図書館から団体貸出を受け、多くの図書を提供する。



読書の幅を広げ、深めるための工夫

◆ 読書クイズの活用

子どもたちは、自分たちが読んだ好きな本の中から友だちにもすすめる本を選び、「紹介カード」を書く経験を積んできた。さらに、楽しんで本を読むようにするための手だてとして各自が選んだ本の「読書クイズ」作りをした。子どもたちは、より難しい問題を作るために、選んだ本をさらに深く読むようになり、また、他の子の作るクイズを解くためにその子の選んだ本もより深く読むようになった。

◆ ○×クイズの活用

教師が物語の読み聞かせを行い、その物語の内容に関する正誤問題(○×クイズ)を解く活動を行った。クイズを解くためには、物語の場面の順序、登場人物、場面の様子等を確実に把握しながら聞かなければならないために、集中して聞いた。答え合わせのときには、×の箇所を正解を共に確認していく。

◆ 地図を書く

教師が物語りの読み聞かせを行い、二人一組で物語の主人公が通った所をクレヨンで地図にした。完成後にそれぞれ発表しあった。全部の組が発表した後に、作者の書いた地図と比較してみると、ほとんどの組は、作者の地図とほぼ同じであった。読み聞かせに集中して聞くことができ、主人公の移動や時間の経緯をしっかりと理解することができた。

読書会で感想や思いを分かち合う

同じ本を読んで、感想を交換することによってそれぞれの思いを分かち合い、共有しあう読書会を実践した。子どもたちが読書会で読む本を3冊選び、グループごとに読む本を決めて、各自読んだ後に「感想カード」を書いた。

読書会は、グループ内で各自「感想カード」をもとにして、感想を発表し合い、自分の感想と他の子の感想を聞き比べる。その後、自分の感想に他の子の感想を聞いて気づいたこと、考えたことなどを書き加えて自分の感想や考えを深めた。その後、学級全で感想の交流を図った。

ほとんどの子が読書会に興味を示し、また開きたいと意欲的である。読書会によって自分や友だちへの理解が深まり、これにより読書の世界が一段と広がっていった。

A君の変容

- ・ファンタジーが好きなので、説明文のようなものは苦手だった。
- ↓
- ・著者は、絶対に諦めないすごい人だけど、小さいときはぼくと同じの落ちこぼれだったんだ。
- ↓
- ・何事も諦めないで、忘れ物をしないことに努力し、達成できた。これからも諦めずにいろいろなことに取り組んでいきたい。

C県C市立C小学校 豊かな学びと読書指導

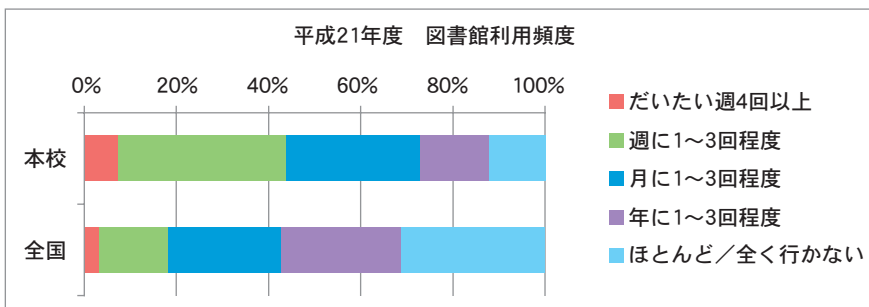
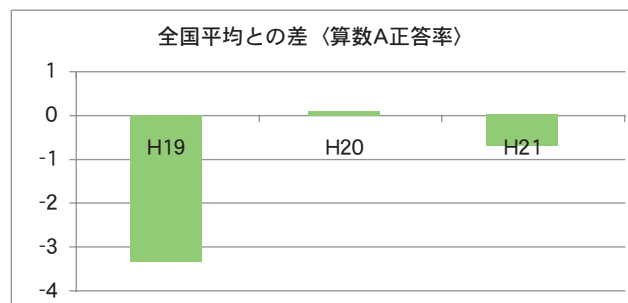
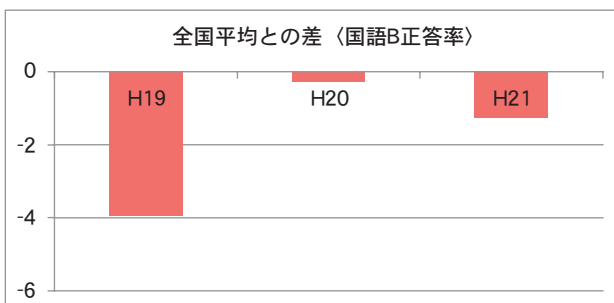
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	3学級
第2学年	3学級
第3学年	3学級
第4学年	3学級
第5学年	3学級
第6学年	3学級
特別支援	1学級
全児童数	約650名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	23名
講師	8名
養護教員	1名
栄養教諭	1名
事務職員	3名

学校図書館の概要

蔵書冊数	11,506冊
図書標準達成率	100%
年間図書費	509,000円
年間貸出数	16,053冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	無
ボランティア	無
担当分掌名	指導部(学ぶ力)
図書館主任	有
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- ・教科の平均正答率の全国平均との差が縮まっている
- ・学校図書館などへ行く児童の割合が多い

読書に関する取り組み

- ・「読書がんばりカード」を配布
- ・多読者の表彰 前期の多読者を図書室に掲示した。また前期と後期に分けてクラス毎に「読書の王様」を選出して表彰
- ・読書週間の実施 11月に校内読書週間
- ・ボランティアの読み聞かせ（月に2～3回）
- ・全校朝読書 担任も一緒に読書

学力向上に関する取り組み

- ・各教科における調べ学習 国語・社会科・理科・総合において、自分の目当てに基づき調べ学習を実施
- ・問題解決のために、必要な情報を選択して、見通しを持って学習する子の育成の取り組み
- ・情報収集のためのインターネット・CD-ROMの活用

読書と学力との関係についての考え方

- ・言葉(語彙)をたくさん獲得することが学力を高めることにつながる。
- ・自分が理解したことを他の言葉に変えて表現することが学力そのものに重要である。語彙力が読書によって得られる。

学年ごとの必読図書

◆ 目的 物語やノンフィクションを中心とした読書を通して、読解力を高める。
自分の好きな本に偏ることなく、読書の幅を広げる。

◆ 必読図書は学年ごとに発達段階に合わせて、5冊の本を選定する。

シリーズものはその中から好きなものを選んで読む。すべて読み終えた児童には完読賞を渡す。

1年	2年	3年	4年	5年	6年
きつねの子 シリーズ	レオ＝レオニ シリーズ	はれときどき ぶたシリーズ	さいとうりゅ うすけの本	障害を知る本 シリーズ	魔法の言葉 シリーズ
14ひき シリーズ	わんぱくだん シリーズ	エルマーのぼう けんシリーズ	子ども伝記 シリーズ	ドキュメンタリ ー童話シリーズ	青い鳥文庫 シリーズ
どうぶつの 写真絵本	心・からだ・ シリーズ	からだのふし ぎしりたいな	科学の アルバム	まんが人物館	プロジェクト X
がんこちゃん シリーズ	日本の民話 絵本	こども世界 名作童話	あらしの夜に シリーズ	世界を変えた 日本の技術	星新一 シリーズ
ともだち シリーズ	ぼくは王さま シリーズ	アニメ絵本 シリーズ	五体不満足	生まれて よかった	鈴の鳴る道

楽しい読書

◆ 休み時間、児童は学校図書館で自由に読書できる

物語だけでなく、知識の本を選んで読む児童もいる。

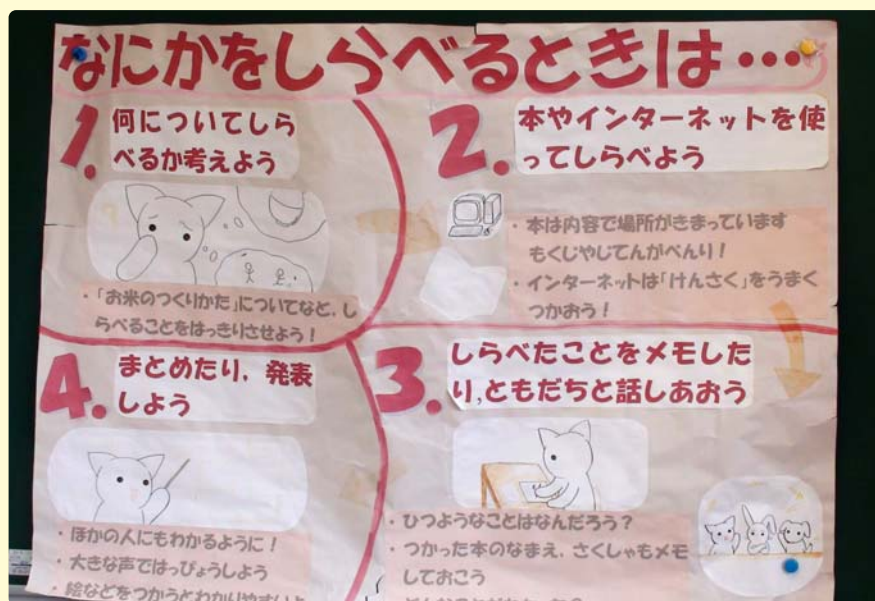


調べ学習の手順

◆ 学校図書館に調べ学習の手順の掲示がある

なにかをしらべるときは

1. テーマの決定
2. 図書や情報の探索
3. 情報の活用
4. 発表



読書への興味が広がる館内ディスプレイ

◆ 絵本に題材をとった壁面のディスプレイ



D県D市立D小学校 学習体験と読書の融合

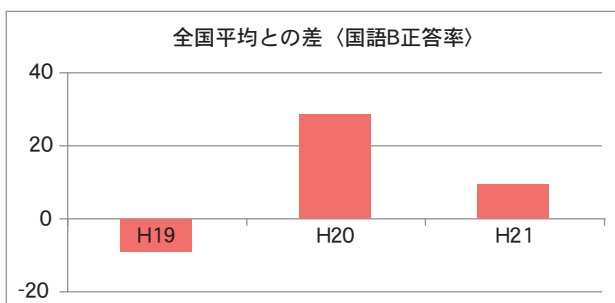
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	1学級
第2学年	1学級
第3学年	1学級
第4学年	1学級
(3・4年生 複式学級)	
第5学年	1学級
第6学年	1学級
特別支援	1学級
全児童数	約60名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	5名
養護教員	1名
栄養職員	1名
事務職員	1名

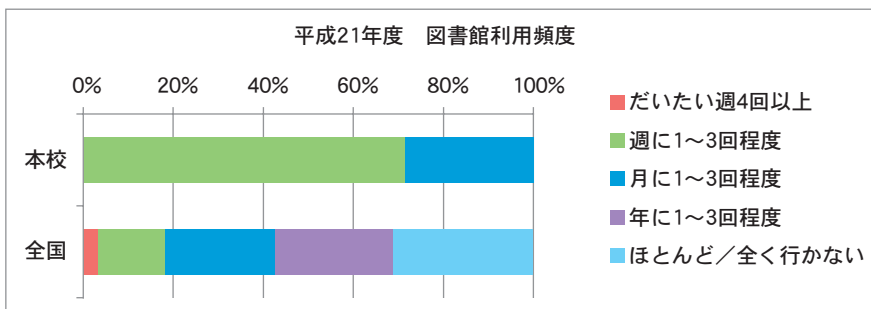
学校図書館の概要

蔵書冊数	5,663冊
図書標準達成率	124%
年間図書費	157,000円
年間貸出数	5,449冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	有(月2回)
ボランティア	無
担当分掌名	指導(図書館教育)
図書館主任	有(司書教諭兼務)
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



注) 小規模校のため、年度ごとの変動が大きい



・学校図書館などへ行く児童の割合が多い

読書に関する取り組み

- ・ 全校一斉の読書時間の実施
- ・ 学校のアクションプランによる読書活動の推進
読書量を増やすための目標設定 読書に興味を持つための目標設定
- ・ 学校図書館の読書センター化
- ・ 児童図書委員会の啓発活動および日常的活動
- ・ 読書郵便 児童と児童だけでなく、児童と保護者の間でも

学力向上に関する取り組み

- ・ 学校図書館の「学習・情報センター化」
- ・ 図書館利用指導計画系統表に基づく図書館資料の活用の指導
- ・ 学校図書館を児童の主体的学習の場として活用

読書と学力との関係についての考え方

- ・ 読書が学力に直結しないが、読みとおすことで自信がついて、主体性と自主性が身につく。それが文脈の中で語彙を理解する力、論理力、表現力、書く力、読む力、感性を磨くことになる。
- ・ 経験したこと（「それ、知ってるよ」）と本を読んだこと（「本に書いてあったよ」）を結びつけて、考えるようになる。
- ・ たくさんの図書の中で、疑問に思ったことを追求するようになる。

読書の木

児童の読書意欲を高めると同時に、日本十進分類法になじませるため

- ◆「お気に入りの本」に一言感想を書いて枝に貼り付ける。

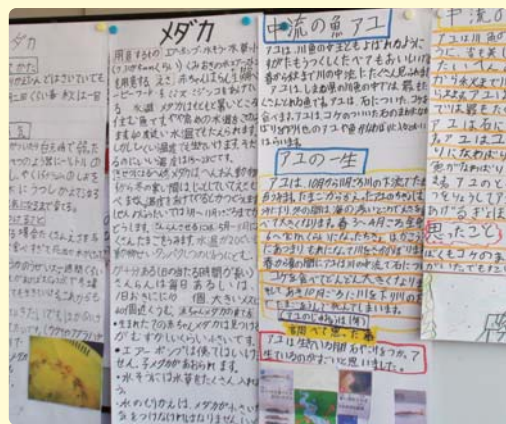
校舎内の壁にある読書の木は日本十進分類法の最初の桁(類)ごとに分かれている。



- ◆ 2類の歴史、3類の社会科学の読み物、8類の語学の感想は少ない。
- ◆ 9類の文学・物語の感想は木が見えなくなるくらい多い。

調べ学習の成果

- ◆ 調べ学習の成果を校舎内の壁に掲示する。子どもたちは地球温暖化について調べた。



- ◆ 地域の自然の中で体験したことや地域の人々たちのくらしを見学して、学校図書館でさらに詳しく調べて発表する。

活発な図書委員会と心安らく学習の場

- ◆ 司書教諭に指導された児童の図書委員会で話し合ったことを図書館運営に反映する。

司書教諭と学校司書、図書委員が中心になって、机・椅子の並べ方、書架の配置、掲示などを工夫している。学校図書館は校舎1階で北向きだが、明るく開放的で子どもたちが心安らく場になっている。



豊かな学習を支える資料



- ◆ 地域の人が寄贈した古い百科事典と新しい百科事典を比較しながら、インターネットの情報も活用して、必要な情報を発見する。

- ◆ 児童が調べた成果やパンフレット類をファイル資料として整理・保存している。



E県E町立E小学校 読書活動で豊かな言語や感性、想像力を育む

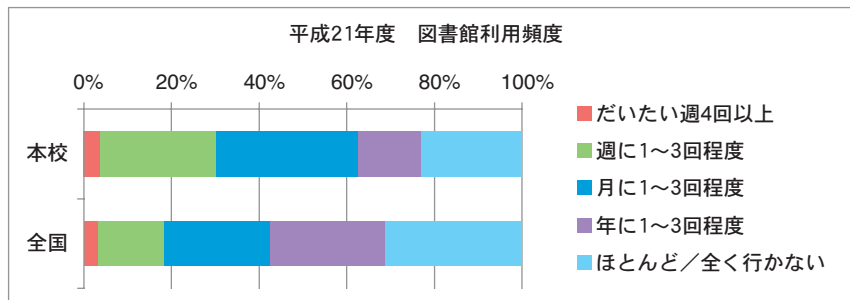
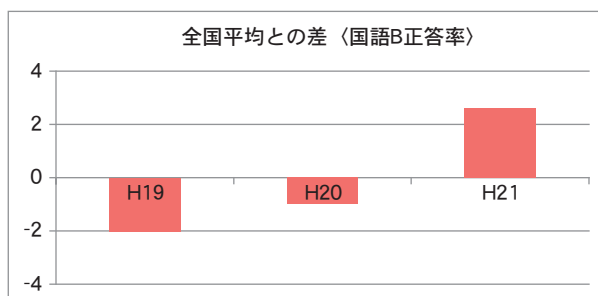
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	3学級
第2学年	3学級
第3学年	3学級
第4学年	3学級
第5学年	2学級
第6学年	3学級
特別支援	1学級
全児童数	約500名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	20名
講師	5名
養護教諭	1名
嘱託事務職員	1名
支援員	1名
校務員	2名

学校図書館の概要

蔵書冊数	10,699冊
図書標準達成率	99.4%
年間図書費	200,000円
年間貸出数	20,827冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	有
ボランティア	(読み聞かせ)数名
担当分掌名	研修部・図書館教育
図書館主任	司書教諭兼務
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- ・平成19年度、全国平均を下回っていた国語Bの平均正答率が、平成21年度は上回る
- ・学校図書館などへ行く児童の割合が多い

読書に関する取り組み

- ・火曜・木曜日は朝読書、朝読書の時間は高学年に学校図書館を開放
- ・各学期にテーマを設けて読書週間を計画
- ・必読書の取り組み
- ・読書感想文・読書感想が指導の実施
- ・読み聞かせ・ブックトークの実施
- ・町内の取り組みで「ノー・テレビ　ノー・ゲーム・デー」に合わせて、毎月水曜日は読書の宿題を取り入れる

学力向上に関する取り組み

- ・各教科の図書館年間利用計画に基づいて知識を高めるように指導
- ・情報教育年間指導計画に基づくコンピュータの使い方と発表方法の指導

読書と学力との関係についての考え方

- ・読書をとおして語彙力、想像力、探究心が身につく。読書の楽しさを知ったとき、自分で読める自信と文章読解力が身につく。
- ・一つの世界(物語)を知ったとき、他の世界も知りたくなる。他の世界への想像力と探究心が働くと学力が身につくであろう。
- ・何事も文章を読むことから始まるので、その力が学力に関わる。

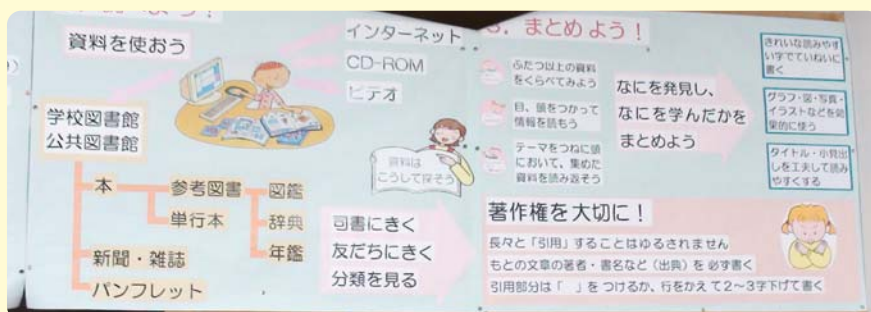
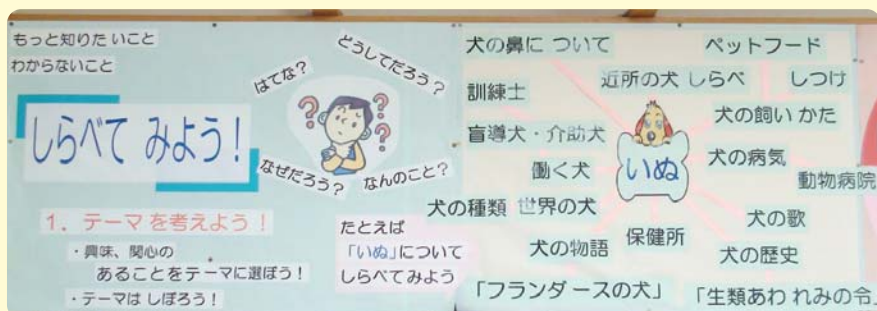
必読書「E小文庫」とよく読まれるベストリーダー

- ◆学年に適した10冊の本を先生が中心に選書した「E小文庫」の中から1年間で低学年は8冊以上、高学年は6冊以上読めるように取り組む。
必読図書の進捗状況は毎月調査して掲示して、意欲が継続するように努めている。
- ◆各学期ごとにテーマを設け、読書週間を計画している。
- ◆各学年でよく読まれている図書の展示



調べ学習の方法と資料の充実

- ◆学校図書館には調べ学習の方法が掲示されている。



学校図書館の展示

◆季節や行事に合わせた図書の展示・
掲示を随時行っている。

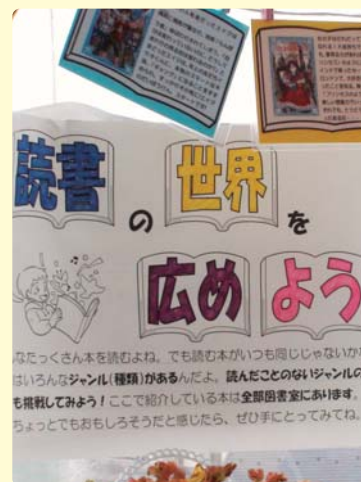


◆空き箱で作った「ものしり博士たち」



校内の展示

◆校内の廊下に児童が読書に興味を持てるように展示がされている。



F県F市立F小学校 静かで落ち着いた環境で読書

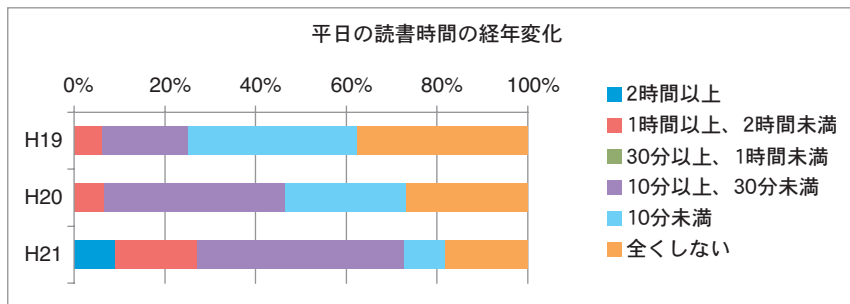
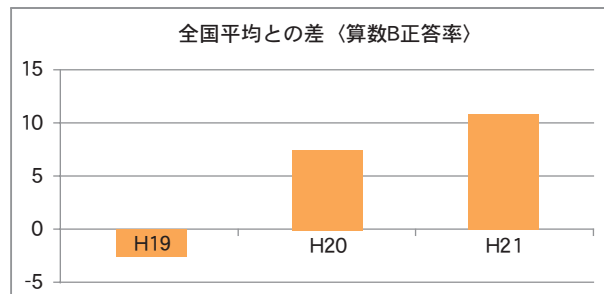
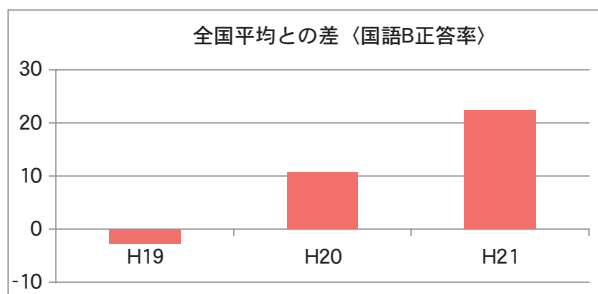
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	1学級
第2学年	1学級
第3学年	1学級
第4学年	1学級
第5学年	1学級
第6学年	1学級
特別支援学級	1学級
全児童数	約100名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	7名
講師	1名
養護教員	1名
事務職員	1名

学校図書館の概要

蔵書冊数	6,939冊
図書標準達成率	120%
年間図書費	36,300円
年間貸出数	5,333冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	無
ボランティア	無
担当分掌名	指導部(教科・領域)
図書館主任	有(司書教諭兼務)
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- ・平成19年度、全国平均を下回っていた教科の平均正答率が、平成21年度は上回る
- ・1日あたりの読書時間が増加

読書に関する取り組み

- ・校内研究として「自ら課題を見つけ、追求する子の育成」を設定
「授業で読みを深め、生かす」「図書館で読みを深め、生かす」
- ・朝の読書タイム
- ・週末の土曜日と日曜日に読書の宿題
- ・1年生の担任が読み聞かせ
- ・月に2回ほど、4～6年生の図書委員が低学年へ読み聞かせ
- ・秋に読書マラソン
- ・読書に関連するポスターを学校図書館に展示

学力向上に関する取り組み

- ・国語科と算数科で学力向上プランを実施する。
- ・全教科で「授業で読みを深め、生かすこと」を目標とする

読書と学力との関係についての考え方

- ・読書を通じて読み取る力を育てる。
- ・自分の意見と他人の意見を分けて考えるようにすることで、学力向上につながる。

本と友だち広場

◆ 公共図書館から50冊以内で団体貸出を受ける。

4月・5月 春 昆虫 草花 11月・12月 環境 クリスマス 福祉
6月・7月 梅雨 夏 七夕 星 1月・2月・3月 冬 国際理解 室内遊び
9月・10月 秋 スポーツ 芸術

月はじめに借りた本を校舎1階の入り口付近の「本の友だち広場」に一覧表とともに配架する。

教員が当番で責任を持って管理する。



読書の宿題

◆ 金曜日の放課後、下校する前に児童たちは学校図書館へやってきて、本を借りる。
蔵書はすべてコンピュータで管理されて、児童が貸出手続きを取る。



学校図書館を使った調べ学習

◆ 授業の中でテーマを決めて調べ学習をする。

児童のほとんどが調べる手順を理解していて、テーマを自分で設定して、図書資料を探して、必要な部分を書き写している。



授業内容による分類記号に従った配置

◆ 図書資料を授業内容に応じて配架している。



G県G町立G小学校 3年間で学校図書館活用を達成

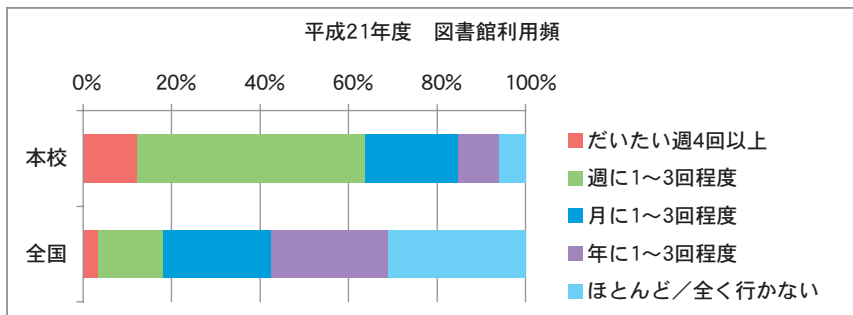
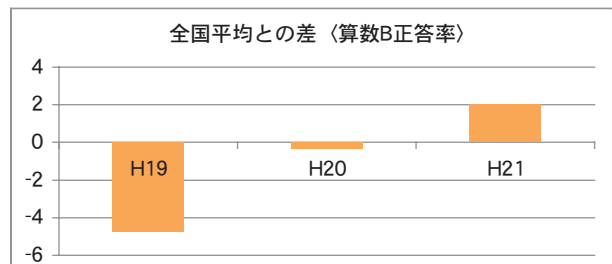
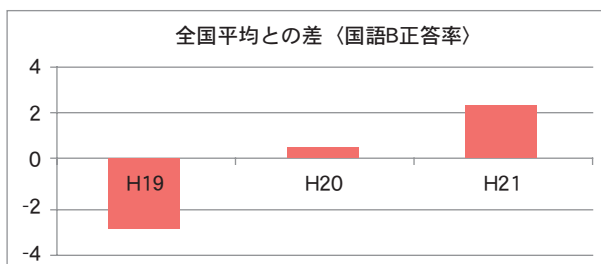
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	3学級
第2学年	3学級
第3学年	2学級
第4学年	2学級
第5学年	3学級
第6学年	2学級
全児童数	約450名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	19名
講師	4名
養護教員	1名
学校司書	1名
事務職員	2名

学校図書館の概要

蔵書冊数	9,210冊
図書標準達成率	91.6%
年間図書費	590,000円
年間貸出数	52,555冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	有
ボランティア	有
担当分掌名	図書館教育部
図書館主任	有
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- ・平成19年度、全国平均を下回っていた教科の平均正答率が、平成21年度は上回る
- ・学校図書館などへ行く児童の割合が多い

読書に関する取り組み

- ・校内研究に位置づける(平成19年度から)確かな学力に重点を置くため、学校図書館活用教育に
- ・「図書の時間」を週1回、全クラスで実施
- ・図書館クイズ
(夏休みに全職員で手分けして作成)
- ・読書に関連する児童の作品を、学校図書館に展示
- ・おすすめ図書を読破した児童を顔写真入りで廊下に掲示



学力向上に関する取り組み

- ・年間計画を立て、見通しを持って図書館を活用した授業を実施する。
- ・「図書館だより 職員版」で、学校図書館を活用した授業のノウハウを公開して、全職員で共有する。

読書と学力との関係についての考え方

- ・見て聞くだけでは学習にならない。最後のゴールは伝えること。伝えるためには整理してまとめる。
- ・読書は学力向上の基礎。文字から離れたら、学習は出来ない。
- ・聞くことから学習が始まり、読むこと、話すこと、書くことを順に身につけて、自学が確立する。
- ・詰め込んだ子は、使えない。「こういう風に学ばばいいんだ」が将来生きてくる。

子どもの成長を実感する

◆ 1年目の子どもの実態

- ・学校図書館活用を始めてみると、調べる本が読めない。
- ・読み取りに時間がかかる、書いていることに間違いがある。

◆ 1年目の終了時

- ・簡単な調べ学習なら、低学年でもできるようになった。
- ・「時間内にワークシートに書く」といった作業が、さらっとできるようになった。

◆ 教師が実感した「子どもの成長した姿」

- ・低学年でも本が探せるようになった。
本の整理と探し方の指導を同時に行った結果である。
- ・読めない子への支援が不要になった。どの子もよく読み込んでいる。
- ・わからないときには、前に戻ったり、後ろを読んでもみたりとか、工夫している。
- ・各学年の「おすすめ図書」を毎年見直すことになった。
下の学年で読む力をつけてくるので、前年度のおすすめ図書では飽き足らない。
「その本はもう読んでしまった」という子が続出した。
- ・文章題がよく解けるようになった

本を読むと力がつく
んだと、肌で感じる。

学校図書館を活用する体制づくり

◆ 専任の司書教諭

- ・週1回の読書の時間を全クラス担当し、体系的な利用指導を徹底する。

◆ 授業は3人体制で行う

- ・担任・司書教諭・学校司書の3人で授業を行う。
- ・学校図書館に任せてしまわない。
- ・学校図書館に助けをもらいながら指導をすると力がつく。

1・2年目は国語科を窓口教科にし、1年に1単元重点単元を決めて取り組んだ。1年目は研究授業1つだったが、2年目は担任全員が研究授業を行った。

◆ 町全体での取り組み

- ・全小中学校が学校図書館の活用に取り組む。
- ・学校図書館支援センターで会合を開いて、小中連携を行う。



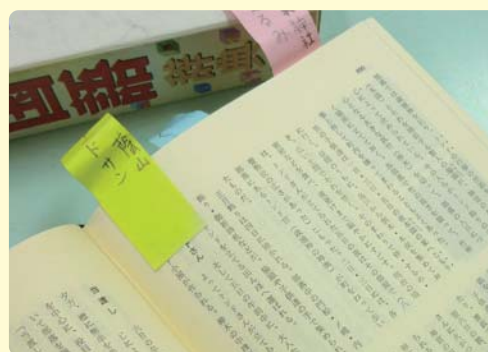
放課後に図書館で学習する児童

児童用の資料の収集

◆ 地域に関する資料

地域に関する書籍は少ないので、

- ・パンフレット等を積極的に収集し、整理して提供している。
- ・町史や広報が重要な情報源になるが、児童には読めないなので、教師やボランティアなど、大人が横で読んであげる。
- ・子ども新聞を2部とって、記事を切り抜いて資料を作る。
記事にルビがふってあり、子どもでも理解できるレベルの内容



まねから始める

◆ 先進校を見学したり講師を招聘して学ぶ

見学に行くと、子どもの姿が違う

～先進校をまねたこと～

- ・調べる学習のパターン
見つける — 課題を見つける
つかむ — 情報集め→整理
伝え合う
※国語にこれに適した単元がある。まずはそこから始めた。
- ・まずゴールを示す。そのためには、前年度の児童の作品を見せる。
教師が作ったゴールよりも効果がある。
- ・情報機器の活用
情報機器を使うと効果的であることがわかり、帰ってすぐに取り入れた。
機器が取り合いになり、台数を増やした。
- ・書く前に話させる
話すのは何度間違えても消しゴムがいらぬ。そうしているうちに、考えがまとまってくる。まねしてみると、効果的だとかいいとか、わかるんです。

まねしてみると、効果的だとかいいとか、わかるんです。

H県H市立H小学校

地域・家庭と連携し、読書の習慣化を図る

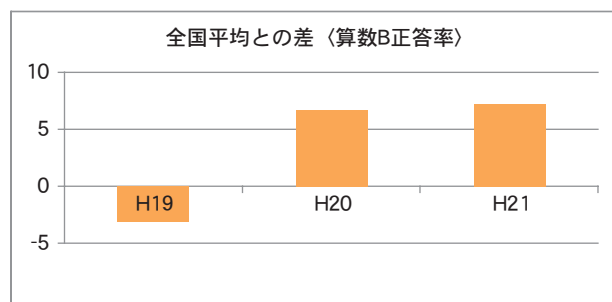
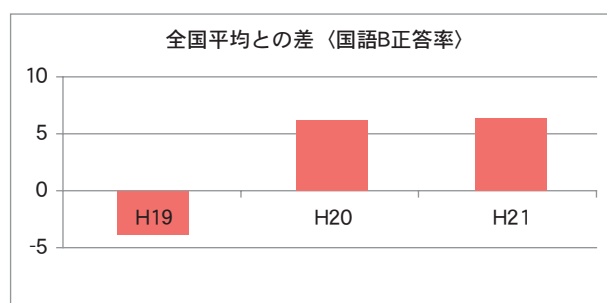
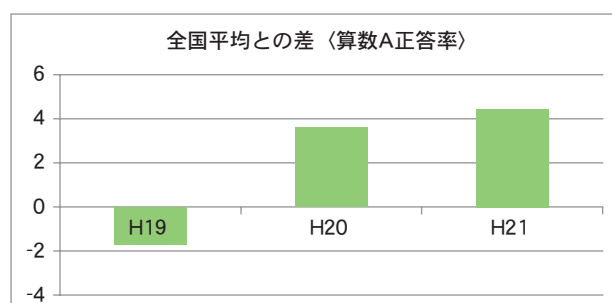
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	1学級
第2学年	1学級
第3学年	1学級
第4学年	1学級
第5学年	1学級
第6学年	1学級
特別支援学級	1学級
全児童数	約120名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	8名
養護教諭	1名
栄養教諭	1名
専門員	1名
非常勤講師	1名
生活支援員	1名
校務員	1名

学校図書館の概要

蔵書冊数	5,913冊
図書標準達成率	106%
年間図書費	210,000円
年間貸出数	7,815冊
組織	
司書教諭	無
学校司書	無
ボランティア	有
担当分掌名	学校図書館
図書館主任	有
施設	図書室 調べ学習室

全国学力・学習状況調査の特色



・平成19年度、全国平均を下回っていた教科の平均正答率が、平成21年度は上回る

読書に関する取り組み

- ・ 教師が、ブックトーク、読み聞かせなどで読書に対する興味・関心を高める。
- ・ まずは、できるだけ多読させることから始める。
- ・ 全校で読書集会、うきうき集会、読書祭り等の読書行事に取り組む。
- ・ 読書の質を高めるために、お薦めの本リストを作成する。
- ・ 保護者向けの「読書だより」を発行する。

学力向上に関する取り組み

- ・ 読書によって読書力が育ち、その過程で思考力、創造力、表現力がつくので、学習への積極性がつき、深く考え、発表できるようにする。
- ・ 「情報を活用する学び方の指導内容体系表」に基づいた学習活動を展開する。
- ・ 単元に関連する「関連読書」、「発展読書」により学習を広げ、深める。
- ・ 児童・保護者・教師の読書実態調査の分析に基づき、調べ学習用の図書等を充実させ、学習を活性化させる。

読書と学力との関係についての考え方

- ・ 適切な読書指導を継続することにより、学力は伸びていく。
- ・ 学力の高い子は、読書によってさらに論理的な思考力が伸びる。
- ・ 過度な読書指導は、読書力の低い子にとっては負担となるので留意する。
- ・ 読書力の低い子の指導法が課題となっている。

読書への意欲を高める指導

◆ 推薦図書を定め、習慣化を図る

- ・学年別に「お薦めの本リスト」を作成

◆ 「読書ラリー」で読書意欲を高める

- ・「お薦めの本リスト」の本をコーナーに別置
- ・「読書ラリーカード」を作成
- ・リストの本を読み終わると担当がカードにスタンプを押す



◆ 読書郵便で心の交流も

- ・読んだ本の感想を絵と文で特製のはがきに書いて友だちに送る
- ・宛先は、友だちから異学年の子、先生へと広がる

家庭と共に読書活動を推進

◆ 家庭へ読書の啓発

- ・毎月第3土曜日を「家族ふれあい読書の日」として家族読書を推進
- ・読書便りでお薦めの本、ボランティアの本の紹介等の情報を提供

◆ 地域との連携

- ・読書ボランティアの読み聞かせ

◆ 関係団体との連携

- ・市立図書館、県立図書館から集団貸し出しを受ける
- ・隣接する町の公共図書館の司書が来校し、パネルシアター等を上演

読書環境を整備し、親しめる学校図書館に

◆ 学校図書館の整備・充実を図る

- ・ 児童からのリクエストにより、子どもたちの読みたい本を充実
- ・ 少人数の読み聞かせ、くつろいで本が読めるように畳敷きのコーナーを設置

◆ 読書意欲を高める環境づくり

- ・ 普段あまり読まれない本を集めてコーナーを作り配架
- ・ 家族ふれあい読書にちなんだコーナーの設置



◆ 校内掲示による環境づくり

- ・ 児童玄関前、学校図書館近くの階段踊り場に読書活動掲示コーナーを設置
- ・ 読書集会、うきうき集会の記録写真や感想を掲示
- ・ 読書ラリーの参加呼びかけ、ラリー達成者を顕彰

◆ 図書館キャラクターを児童より募集

- ・ 図書館キャラクターを児童より募集し、「ごっ本大王」をキャラクターに
- ・ 図書館入り口に「ごっ本大王」の人形を置き、読書を呼びかける
- ・ 手作りの「ごっ本大王スタンプ」でラリーカードに押す



I県I市I小学校 読書の幅を広げ、最後は作品としてまとめる

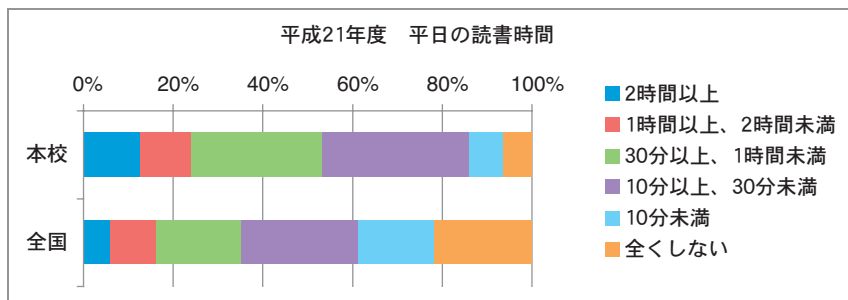
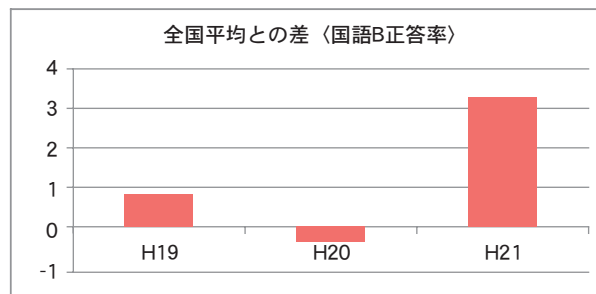
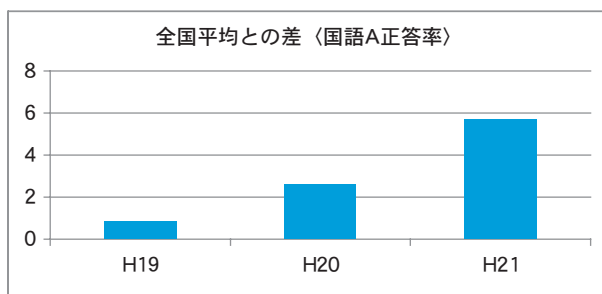
学校の概要

校種	小学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	3学級
第2学年	3学級
第3学年	2学級
第4学年	2学級
第5学年	2学級
第6学年	2学級
全児童数	約450名
職員数	
校長	1名
教頭	1名
教諭	16名
講師	3名
養護教員	1名
技師	1名
事務職員	8名

学校図書館の概要

蔵書冊数	11,605冊
図書標準達成率	138.8%
年間図書費	367,000円
年間貸出数	9,400冊
組織	
司書教諭	有
学校司書	無
ボランティア	有
担当分掌名	学力向上推進部
図書館主任	有
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



- ・教科の平均正答率について、平成19年度より平成21年度の方が、全国平均との差が大きい
- ・1日あたりの読書時間が全国平均より長い

読書に関する取り組み

- ・おすすめ図書、読書通帳、親子読書で読書の幅を広げる
- ・朝の「読書タイム」で読書習慣を定着させる
- ・読書行事で読書の意欲を高める
- ・委員会児童による読み聞かせ・読書クイズ
- ・先生による読み聞かせ会「わくわく読み聞かせタイム」
- ・読み聞かせボランティアによるおはなし会
- ・感想文や作文のコンクールへの積極的な応募

学力向上に関する取り組み

- ・基礎基本の習得の時間を毎朝15分間とっている。
- ・「形にする」ということを、どの教科・領域でも大切にしている。

※研究主題の「分かる！聞ける！話せる！子どもたちを育てよう」にも、それが表れている。



読書と学力との関係についての考え方

- ・読んで、自分の考えを持って、表現できることが大切。
- ・授業の中で、以前学んだ教材や自分で読んだ本の内容と関連づけた発言を聞くと、発言の質が高まったと思う。
- ・それと同時に、子どもたちの心を豊かにしていきたい。素直でなければ、伸びることができないから。

読書の幅を広げる指導

◆ 学年に応じた図書選定

国語科教科書で紹介されている本を学校図書より選び、「学年おすすめの図書」とした。おすすめの図書にはシールを貼り、児童にもわかりやすいようにしている。おすすめの本は、図書室の本棚にまとめて置くように、探しやすくしている。

◆ 学年に応じた読書指導

各学年で以下のような目標を設定し、読書の内容が充実するような取組を各学年で実施している。

学 年	目 標	取 組 例
低学年	教師が指定した本を読む。	学級に読ませたい本を用意する。 教師による読み聞かせをする。
中学年	読書の幅を広げる。 ・ 様々な分類記号の本を読む。	教科書教材に関連する本を読む。 分類記号の指導を行い、記録をさせる。
高学年	手ごたえのある本を読む。 ・ ページ数の多い本、文章の多い本を読む。 ・ 読書通帳5,000ページ以上を目指す。	教科書教材に関連する本、作者の本を読む。 読書通帳の継続的な記録をする。

読みを深めるための工夫

◆ 読書カードの活用

国語科の学習では、単元の目標を達成するために、読書カードの活用をした。読書カードの形式や内容は、学年の実態や単元の目標によって違うが、単元を見通した計画が必要である。

2年生の「名前をみてちょうだい」の学習では、物語を読んでおもしろかったことを「読書ゆうびん」に表し、学習のまとめをした。普段、自分が読んだ本の著者や感想を読書カードにまとめ、綴じておき、「読書ゆうびん」を書くときに役立つことができた。

6年生の「宮沢賢治」の学習では、宮沢賢治の作品に触れる環境づくりとして、「宮沢賢治コーナー」を設定した。ここに、読んだ本のあらすじや一言感想などを書いた読書カードを掲示し、宮沢賢治の生き方に関する興味や関心を高めることができた。

【2年生の読書カード】

読書意欲の向上

◆ 読書通帳

平成19年度から読書通帳を作成し、全学年で共通理解のもと取り組んでいる。また、21年度からは、児童の読書量増加を目指し、各学年の目標を設定した。

各学年の目標	学 年	目 標
	1～3年	50冊
	4年	3,000頁
	5年	4,000頁
	6年	5,000頁

自宅や市立図書館の本を読む児童も多く、貸出数だけでは読書傾向はつかめない。

◆ 読書感想文コンクール等への応募

ただ読むだけではなく、そこで学んだものを形にすることによって、さらに学びを深めることができる。そのため、読書感想文コンクール等への応募を奨めている。しかし、これには他の狙いもある。

感想文や作文で表彰される児童が出るなど、実際に成果が表れており、他の児童の励みにもなっている。

また、コンクールの受賞も含めて、様々な教育活動がしばしば地元紙で取り上げられ、これもまた児童の学習の励みになっている。



親子読書

校長名で保護者に依頼の通知を出して実施。

◆ 目的

- 親子で読書に親しむことで、児童が本に触れる機会を増やし、読書意欲の向上を図る。
- 児童の読書量を増加させ、豊かな想像力と確かな学力向上をめざす。

◆ 取り組む日

毎月1回、金曜日から第3日曜日(家庭の日)

◆ 取り組む方法

- 読み聞かせをする／親子一緒に読書をする
- 本についてお話をする
- その他(各家庭での工夫した取組)

◆ 取り組む時の約束

- 読書するときは、テレビを消す。
- 読書をする時間を決める(○時から○時まで)
- 親子読書カード(読書通帳に添付)に記録する。

実施日	実施方法 (実施した方法に○をつけましょう。)				時間 (分)
5月7日	読み聞かせ ○	各自読書	本の話	その他	15
読んだ本	ふうせんのたび				読者の印
感想	お父さんの読み聞かせを家族みんなで聞きました。みんなが合わせれば何でも出来る!という夢のあるお話しでした。				担任印 5.5.19 大塚
実施日	実施方法 (実施した方法に○をつけましょう。)				時間 (分)
6月2日	読み聞かせ ○	各自読書	本の話	その他	10
読んだ本	しらゆきひめ 40ページの物語				読者の印
感想	ホビスターの物語の1ページ、ストーリーの違う物語になっていました。おもしろかったです。				担任印 6.2.19 大塚

J 県 J 町立 J 中学校 多様な取り組みで本と生徒をつなぐ

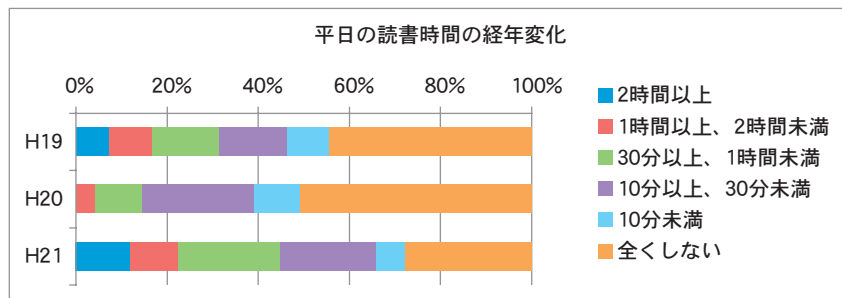
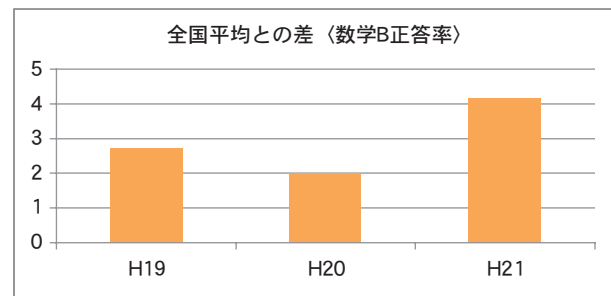
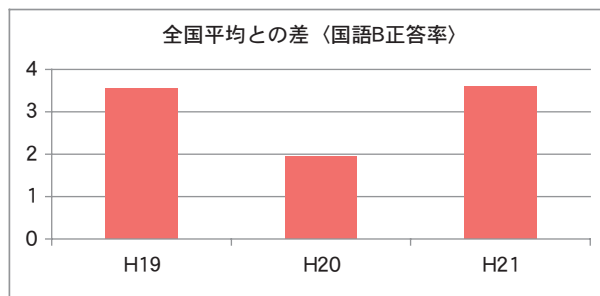
学校の概要

校種	中学校	
児童／生徒数	学級数	
第1学年	2学級	
第2学年	2学級	
第3学年	2学級	
全生徒数	約200名	
職員数		
校長	1名	
教頭	1名	
教諭	11名	
養護教諭	1名	
講師	2名	
嘱託	5名	
事務主事	1名	
技術員	1名	

学校図書館の概要

蔵書冊数	7,420冊	
	(2010年2月17日現在)	
図書標準達成率	100%	
年間図書費	150,000円	
年間貸出数	975冊	(2月末現在)
組織		
司書教諭	無	
学校司書	有	
	(年54日間 1日6時間 嘱託3校兼務)	
ボランティア	無	
担当分掌	学習指導部図書館担当	
図書館主任	無	
施設	図書室	
	ラーニングルーム室	

全国学力・学習状況調査の特色



・1日あたりの読書時間が平成21年度に増加

読書に関する取り組み

- ・ 中学校での読書は、日常生活における人間形成の大事な一分野との観点にたち、指導の母体は学級とする。
- ・ 望ましい読書の習慣が身に付くよう、刺激と機会を与える。
- ・ 教科担任が行う指導
 - 図書館を活用しての指導を適宜取り入れる。
 - 学習資料の目的に応じた利用の仕方を指導する。
- ・ 全校的な指導
 - 年3回の読書週間の実施
 - 作文・読書感想文の紹介
 - 全校生を対象とする読書実態調査
- ・ 生徒会図書委員会による読書案内・広報活動
- ・ 図書館だよりの発行

学力向上に関する取り組み

- ・ 研究テーマ「共に認め合い、学び合いながら、自己を高めることのできる生徒の育成」の具現化の一つとして「課題意識を持ち、自ら考え学習できる生徒」を掲げている。
- ・ 総合的な学習の時間を中心に、問題の解決や探究的活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てる。
- ・ 小単元内に、様々な文章や資料を「読む」機会や自分の意見を表現する機会を位置付け、「読解力」の向上を工夫する。
- ・ 「学ぶ」ための技術指導として、資料の活用の仕方・発表の仕方などを指導している。
- ・ 朝読書と朝学習に交互に取り組む、さわやかで落ち着いた1日のスタートがきれるようにしている。
- ・ 学校司書が、クラスごとにブックトークを行い、学習と本とを結びつけている。

読書と学力との関係についての考え方

- ・ 自分の体験から言えるのだが、本を読むと文章が整理されてくる、あるいは洗練されてくると感じている。

短い言葉で論理的にまとめられる。

学力にも関わる。読書の効果は大きい。

- ・ 読書が習慣化し、落ち着いて学習に取り組んでいると感じる。

落ち着いた学習態度が学力、読解力向上に結びついているのではないか。

学校長が率先して読書を奨励

◆ 全校朝会で読み聞かせ

『空をつかむまで』著者 関口 尚

- ・考えさせたいこと、訴えたいことを作品に込めて…
「そのための強さを手に入れるには、足を踏み出さなくちゃいけない。それは大袈裟な話ではなくて、きっと身近な一歩であってもいい。たとえば、ぼくの場合、いまここで投げ出さずに走りきること。」

◆ 講話で本の紹介

- ・1日20分の読書でも12日で240分→つまり4時間 薄い本なら1冊読める
- ・夏休みに、ぜひ2冊以上読んでほしい
- ・3年生にとっては、入試のときにしっかりした文章が書ける力がつく
- ・面接のときの役に立つかもしれない
- ・自分が読んで、図書館にもあるお薦めの本
『ザ・マンザイ』『ラストイニング』著者 あさのあつこ
『ナイフ』著者 重松 清 『12番目の天使』著者 オグ・マンディーノ

など

◆ 学校だよりでも読書のすすめ

- ・読書に対する啓発と読書力をつけるきっかけとして朝の一斉読書を実施
- ・「最近こんな本を読みました」と話しかける生徒も出てきた
- ・家庭でも本を食卓の話題にしてほしい

さまざまな角度からの読書指導の取り組み

◆ 全教職員で取り組む読み聞かせ

- ・読書への意欲喚起と豊かな情操の涵養を目指す
- ・学校長は全校朝会で
- ・クラス担任は読書週間開始後、1回目の朝読書の時間に
- ・教頭を含む担任外の教員は、2回目の朝読書の時間に
- ・各教員が選んだ本を紹介し、1部分の読み聞かせをする。

◆ 学校図書館を活用した学習活動の展開

- ・国語科では古典や短歌・俳句の学習に
- ・社会科では歴史学習に資料を活用
- ・美術科では美術全集を作品づくりの参考に鑑賞
- ・家庭科では被服・食物などの学習で活用
- ・修学旅行の事前学習に学校図書館資料を利用

魅力的な読書環境・ラーニングルーム

◆ くつろぎの空間に集い、本に親しむ

- ・ 1階の中心にあり生徒が行き来するところ
- ・ 吹き抜けで、明るい
- ・ 間伐材を利用して作られたテーブルと机
- ・ 低書架に、軽く手に取れる本や、辞典が置かれている
- ・ 12月にはクリスマスツリーも飾られて
- ・ 生徒の作品の展示スペースとしても活用



学習と読書をつなぐテーマ展示

学校司書が中心となって、学習内容や行事にあわせて定期的を選書し配架している

◆ テーマ「進路を考える」

『夢をかなえる本』 著者 パット・パルマー 径書房

『NHK あしたをつかめ 平成若者仕事図鑑』 NHK出版

『夢をあきらめない 全盲のランナー・高橋勇一物語』 著者 池田まき子 岩崎書店

ほか

◆ テーマ「十代の生き方と心」

『14歳の君へ どう考えどう生きるか』

著者 池田晶子 毎日新聞社

『中学時代にしておく50のこと』

著者 中谷彰宏 PHP

『大人になる前に身につけてほしいこと』

著者 坂東眞理子 PHP

ほか



K県K町立K中学校

リニューアルで読書と学習の場の実現

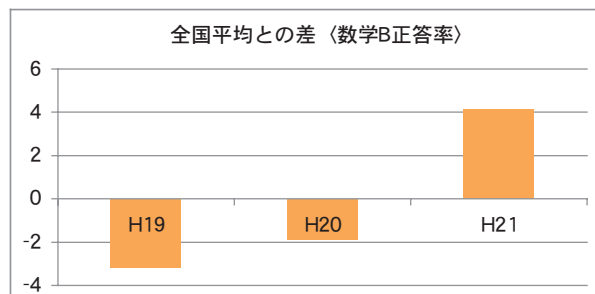
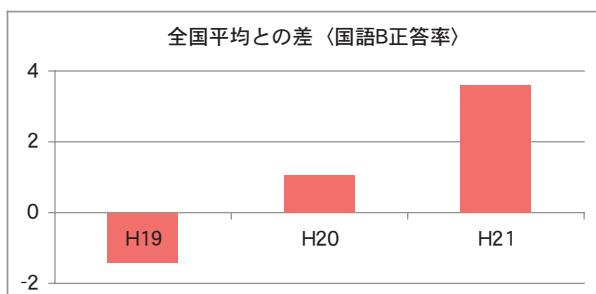
学校の概要

校種	中学校
児童／生徒数	学級数
第1学年	4学級
第2学年	4学級
第3学年	4学級
特別支援学級	1学級
全生徒数	約450名
職員数	
校長	1名
副校長	1名
教諭	24名
養護教諭	1名
カウンセラー	1名
講師	13名(+ALT1名)
嘱託	1名
事務主事	3名

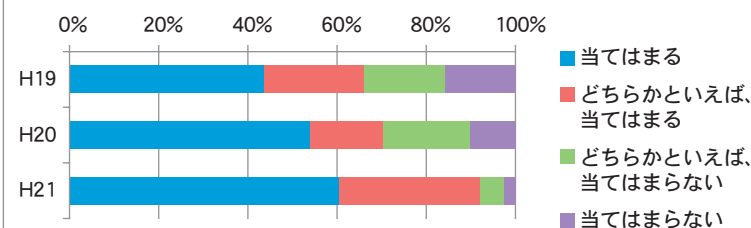
学校図書館の概要

蔵書冊数	11,500冊 (2010年2月12日現在)
図書標準達成率	100%
年間図書費	580,000円
年間貸出数	5,089冊 (2008年度)
組織	
司書教諭	1名
学校司書	2名 (図書館指導員《有償ボランティア》 週4日(1日4時間)勤務日以外でも 勤務する場合がある。)
ボランティア	無
担当分掌名	学習進路部図書館担当
図書館主任	1名(+図書館学年担当3名)
施設	図書室

全国学力・学習状況調査の特色



「読書は好きですか」という質問に対して、肯定的な回答をしている生徒の割合とその経年変化



- ・「読書は好きですか」の質問に肯定的な回答をする生徒の割合が増加
- ・平成19年度、全国平均を下回っていた教科の平均正答率が、平成21年度は上回る

読書に関する取り組み

- ・一人一人の興味・関心を生かした個性の伸長をめざした読書活動を実現する
- ・朝の一斉読書の実施
読書をとおして、生徒たちが知らなかった言葉が増えて使えるようになる
- ・生徒会図書委員会による推薦図書 各学級から2名選出された図書委員のお勧めの本
- ・図書館だより「気まぐれ通信」の発行(月2回) 新着図書紹介、イベント紹介など
- ・新入生オリエンテーション
- ・春に推薦図書を紹介する
- ・夏休みの宿題として推薦図書を読む
- ・学習発表会への支援と生徒の図書委員会による読書イベント
- ・地域の人たちにも理解を得る 新しい書架を組み立てた

学力向上に関する取り組み

- ・教育目標の一つに「【自主】個性を生かし、自ら学び続ける人間」を掲げて、教科と総合的な学習で図書館資料の活用を実施している。
- ・生徒自身が図書館の資料を使って、読んで、考えて、書けるように指導している。
- ・学校図書館のしくみを理解して、コンピュータによる資料検索と分類で、資料が探せるように指導している。
- ・学校図書館指導員が「調べ方ガイダンス」を実施している。
- ・学校図書館指導員が生徒の質問に答えるレファレンスサービスを実施している。

読書と学力との関係についての考え方

- ・それぞれの教科で習ったことを結びつけて考えることができるようになった。
- ・本を読んだことで自分の考えをまとめらようになった。
- ・疑問に思ったことを図書館の資料を使って解決できることに生徒たちが気がついて
いる。そのことが学力向上につながっているのではないか。

あらゆるチャンスを生かして、図書館をアピール

◆ 生徒への読書の働きかけ

読む力をつける、知的好奇心の喚起

ブックトーク、掲示&展示、推薦図書、リクエスト（購入希望図書）への対応

生徒の読む力が結果として調べ学習をスムーズにさせた

◆ 朝の一斉読書の定着

朝の読書の目的

- ①読書の楽しさ素晴らしさを知り、読書の習慣を身につける
- ②すべての学習の基礎である、"文章を読んで理解する力を"高める
- ③読書を通して、想像力、思考力、感動する心を養う
- ④自分の読みたい本を自分で選ぶ体験を通して、自ら学ぶ力を育てる

新年度の1週間は朝も開館

◆ 図書館の充実

使いやすい図書館（サイン、オリエンテーション、調べ学習ガイダンス）

+

使える図書館（特に参考図書を中心に蔵書が充実した）

◆ あらゆるチャンスを生かして教職員へ図書館のアピール

先生向けの図書館オリエンテーション、授業の時に個別にアタック、学内の図書館運営協議会（校長・副校長・司書教諭・図書委員会担当教諭・学年ごとの図書館担当教諭）

教科の学習と読書の取り組み

◆ 学校図書館を活用した学習活動の展開

- ・ 国語科の「枕草子・徒然草を調べよう」で多様な資料を活用
- ・ 社会科では「国調べ・県調べ」で図書館の資料を活用
- ・ 数学科では「数学オリンピック」の問題に挑戦
- ・ 理科では校庭の雑草を百科事典・図鑑を活用
- ・ 英語科では出前ミニブックトークを実施 「サダコ」「キング牧師」など
- ・ 英語科では「原書絵本の多読」も実施
- ・ 家庭科では保育に役立つ「読み聞かせ」についての学習
- ・ 修学旅行の事前学習に学校図書館資料を利用
- ・ 地域資料・各種パンフレットなどの収集
- ・ 総合的な学習(平和・環境・福祉・地雷)で有益なサイトへのリンク

学校図書館を読書と学習の場へ改装

◆ リニューアルで快適な読書環境を実現

- ・ 学校図書館が2年前に校舎の4階から1階へ移設されて、広さが1.5倍に
- ・ 地域の「おやじの会」が書架を製作して寄贈



学校図書館指導員がテーマ展示と掲示を行っている。

◆ 豊かな学習を支える蔵書

総合的な学習のテーマ 1年生：環境 2年生：福祉 3年生：平和



事例の調査から学んだこと

今回事例として取り上げたのは、研究指定などによって読書活動や学校図書館の活用に取り組んだ学校のうち、全国・学力学習状況調査において一定の成果を示した学校である。意図的な取り組みが成果を上げた学校の事例であって、たまたま結果がよかった学校を調査したものではない。

読書活動や学校図書館の活用は学力向上につながる

まず、確認しておきたいのは、読書活動や学校図書館の活用への取り組みが、学力向上につながっているという事実である。今回取り上げた事例の数字がそれを物語っているだけでなく、調査した学校の多くがそのことについて自信を持っていた。

子どもに合わせて取り組みを変える

紹介した事例の中には、年度によって上下に変動を見せている学校もある。同じ取り組みを行っていても、その年々の児童・生徒の違いによって働きかけの効果が異なる以上、変動が生じるのは避けられない。

だからこそ、学校全体で体系的に取り組むことによって1年生から確実に力をつけさせることと同時に、子どもに合わせて取り組みのレベルや内容を変えていくことが必要である。

当たり前のことにきちんと取り組む

ここに挙げた取り組みの多くはこれまでも実践されてきたものであり、読書指導や学校図書館に携わってきた人々には目新しいものはあまりないだろう。しかし、学力の向上は日々の取り組みの積み重ねの結果であり、効果的であるとわかっていることを地道に行うことが大切である。その中から、また新しい取り組みが生まれてくる。

子どもの姿で効果を確認する

読書活動や学校図書館の活用が学力向上につながっていることを確信できなければ、それに愚直に取り組むことは難しい。その効果を知るためには、先進校を見学し、そこでの子どもたちの姿に触れることが一番の近道である。

また、取り組みを始めたなら一年間は継続してほしい。初期の段階では、いままでしていなかったことをするのだから、負担が増すのは当然である。その苦勞は、子どもが成長することによって報われる。

資 料 編

学校図書館の根拠

●法令

『学校教育法』（昭和22年制定）

第三条 学校を設置しようとする者は、学校の種類に応じ、文部科学大臣の定める設備、編制その他に関する設置基準に従い、これを設置しなければならない。

第二十一条

五 読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと。

『学校教育法施行規則』（昭和25年）

第一条 学校には、その学校の目的を実現するために必要な校地、校舎、校具、運動場、図書館又は図書室、保健室その他の設備を設けなければならない。

『学校図書館法』（昭和28年）

第一条 この法律は、学校図書館が、学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であることにかんがみ、その健全な発達を図り、もって学校教育を充実することを目的とする。

第二条 この法律において「学校図書館」とは、小学校（特別支援学校の小学部を含む。）、中学校（中等教育学校の前期課程及び特別支援学校の中学部を含む。）及び高等学校（中等教育学校の後期課程及び特別支援学校の高等部を含む。）（以下「学校」という。）において、図書、視覚聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料（以下「図書館資料」という。）を収集し、整理し、及び保存し、これを児童又は生徒及び教員の利用に供することによつて、学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる学校の設備をいう。

第三条 学校には、学校図書館を設けなければならない。

第五条 学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かななければならない。

『文字・活字文化振興法』

第八条

2 国及び地方公共団体は、学校教育における言語力の涵養に資する環境の整備充実を図るため、司書教諭及び学校図書館に関する業務を担当するその他の職員の充実等の人的体制の整備、学校図書館の図書館資料の充実及び情報化の推進等の物的条件の整備等に関し必要な施策を講ずるものとする。

●学習指導要領

第1章 総則

第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 (9) 各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

(10) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。

学校図書館の役割と仕組み

●学校図書館の役割

『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』（平成20年 閣議決定）から

- ・児童生徒の想像力を培い、学習に対する興味・関心等呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動や読書指導の場
- ・児童生徒の自発的、主体的な学習活動を支援し、教育課程の展開に寄与する
- ・学校教育の中核的な役割を担う

『これからの学校図書館の活用の在り方等について(報告)』（平成21年 子どもの読書サポーターズ会議・文部科学省）から

- ・学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える。学校における読書指導に活用される。
- ・子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供する。様々な本を紹介して、読書の楽しさを伝える。
- ・学校図書館で、図書やその他の資料を使って授業を行うなど、教科等の日常的な指導において活用される。
- ・教室での授業で学んだことを確かめ、広げ、深める、資料を集めて、読み取り、自分の考えをまとめて発表するなど、児童生徒の主体的な学習活動を支援する。
- ・図書や新聞、インターネット等のデジタル情報など多様なメディアを提供して、資料の探し方・集め方・選び方や記録の取り方、比較検討、情報のまとめ方等を学ばせる授業の展開に寄与する。更に、司書教諭によるこれらメディアを活用した利用指導等の取組を通じ、情報活用能力を高めるための授業を自ら企画・実施する。
- ・児童生徒が学習に使用する資料や、児童生徒による学習の成果物などを蓄積し、活用できるようにする。

●学校図書館の仕組み

- 組 織** ・学校図書館の運営は、「学校図書館部」、「学校図書館課」等が担当し、部の下に「運営係」、「資料係」、「指導係」等で業務を分担する。
- 運 営** ・児童生徒の登校時から下校時まで開放されることが望ましい。また、学校の実情に応じてそれ以外にも開館することもある。
- メディア** ・学校図書館には、図書、雑誌、新聞、写真、DVD、情報ファイル等の学校図書館メディアを所蔵し、提供する。また、インターネットを通して各種の情報源にアクセスし、電子情報を得ることができる。
- 利 用** ・学校図書館内で読んだり、利用したりする「閲覧」、家庭に持ち帰り利用する「館外貸出」がある。現在では、学習活動、読書活動に学校図書館メディアを利用することが多くなっている。
- 組 織 化** ・本などを分類等をして所在記号(請求記号)を書いたラベルを背表紙に貼り、本棚に所在記号順に配架する。検索手段として各種の目録を作成し、利用の便を図る。現在、マーク(MARC)を利用したコンピュータ目録が普及してきた。

学校図書館担当者の役割

(1) 学校図書館と専門職員

学校図書館法では、学校には司書教諭を配置することになっているが、40年以上ほとんど配置されてこなかった。この間に、高等学校を中心に学校図書館事務職員(学校司書)の配置が進んだが、小学校・中学校には一部に配置されただけで、あまり進まなかった。

平成9年に学校図書館法が改正され、12学級以上の学校に司書教諭が配置されることになった。現在では、12学級以上の学校には、ほとんど司書教諭が配置されている。文部科学省は、11学級以下の学校にも配置するように指導をしている。

学校図書館の業務は、多岐にわたり、専門的な知識・技能・経験が必要となる。特に学習センター、情報センターとしての機能が重視されている現在では、これまでのような本中心の学校図書館から多種多様な学校図書館メディアをも対象にすることになってきた。これまではあまり必要とされてこなかった情報機器、ICT(情報通信技術)、電子資料、著作権等に関する専門的な知識も必須とされるようになってきた。そこで、学校図書館を担当とする専門職員が必要になり、司書教諭と学校司書が業務を分担してその任にあたることになっている。

司書教諭の役割

司書教諭は、学校図書館法第5条、学校図書館司書教諭講習規程に基づく司書教諭の資格を持ち、学校図書館に関する専門的な知識・技能を持つ者とされる。教育委員会の発令を受け、校務分掌上の学校図書館の責任者(図書館主任)として主に学校図書館の経営・運営及び学校図書館を活用する教育指導を中心に行う。司書教諭の資格を持つ教諭が即司書教諭ではなく、発令を受けた教諭がその学校の司書教諭となる。

学校図書館は一部の教科だけを支援するのではなく、全教科・領域及び児童生徒の心身の成長に大きく関与するために、各教科全般に対する理解、教育課程に関する理解、学習指導の豊富な経験、児童生徒に対する理解等を持つ必要がある。そのために不断の研鑽を積み、常に最新の教育に関する情報を得る努力を要する。

学校司書の役割

学校司書は、司書教諭等と協力し、学校図書館メディアの専門家として児童生徒及び教員と学校図書館を結ぶ専門職員である。現在は法律上に位置づけられていないために身分、待遇、勤務態様面は様々であるが、学校図書館の重要性が認識されるにしたがって配置が進んでいる。主として、図書館サービス及び技術的な業務を行っている。

学校図書館メディアは、本が中心であり、読書活動も本を読むことが中心である。新しく発行された本、話題の本、学習に役立つ本、関連する本など、いつでも情報提供できるように、また購入できるように常に最新の情報を入手する。

その他にも情報技術やICTの発達により出現し続ける様々なメディアもその一部である。新しいメディアの特性、利用法に通暁することは当然であるが、それらの新しいメディアの組織化、さらにどのように児童生徒や教員に提供するか等は、司書教諭同様に不断の研鑽を積み重ねることが要求される。

他の学校図書館部所属教諭

学校図書館担当運営組織（学校図書館部、図書館課等）は、一般的には司書教諭が図書館主任となり、学校司書及び教諭によって組織される。以前のような読書をする場所としての学校図書館として認識されていた頃は、数人で担当している例が多かったが、今日のように学校図書館の利用が活性化すると業務の量も膨大なものとなる。従って一般の教諭も学校図書館部所属教諭として学校図書館の運営に関わることが増えてきた。

運営組織として組織の運営に関する業務、学校図書館の業務、対外的な業務があるが、これらは係りごとに分担し、教諭は係りとして業務を行う。主として司書教諭・学校司書と共に各種コンクールの実施・審査及び学校図書館行事の運営、各種の調査等に携わる。

教職員の少ない小規模校では、一般教員も複数の分掌に属しているために、多くの教諭が学校図書館を担当することはなかなか困難であることが多い。しかし、学校図書館は単に校内の業務の一部分だけを担当するのではなく、「学校教育の中核」として学校全体の教育課程の展開を支援するのであり、相当の人数は必要である。

司書教諭、学校司書、他の学校図書館部所属教諭の連携・協働

学校図書館の業務は、司書教諭と学校司書はそれぞれの専門性に基づいて分担して執行するが、業務によっては、司書教諭、学校司書、他の学校図書館部所属教諭が連携・協力して行うものがある。例えば、読書指導は、学級担任や司書教諭が年間指導計画にそって体系的計画的に行うが、学校司書、他の学校図書館部所属教諭も学校図書館において児童生徒に読書のすすめ、読む本が分からない児童生徒への読書案内等を行っている。このとき、3者がばらばらな考えのもとに行っていると児童生徒は混乱し、読書指導にはならない。3者が読書指導に対する共通認識、共通課題を持ち、日々の指導を実践していく必要がある。

その他に、児童生徒への利用指導、学習活動の支援、図書委員会の指導等は、学級担任、司書教諭、学校司書、他の学校図書館部所属教諭が連携・協働して行うと効果があがる。

学校図書館担当者の役割分担			
司書教諭	学校司書	司書教諭と学校司書	他の学校図書館部所属教諭
図書館経営の目標・計画の立案 年間運営計画の作成及び実施 年間学習指導計画の作成及び実施 年間読書指導計画の作成及び実施 年間情報活用指導計画の作成及び実施 学校図書館を活用する学習指導等 校長等への報告・連絡・相談 読書指導及び支援 学習指導及び支援 情報活用指導及び支援	庶務・会計 館内環境の整備 施設・設備の維持管理 館内案内・サイン 組織化 修理・事前補強 貸出・返却・予約 書架案内 配架・整理 展示・掲示 統計 他館との相互貸借 オリエンテーション	図書リストの作成 レファレンス・サービス 情報サービス 学校図書館利用指導 図書館委員会の指導 学習活動の支援 教員サポート 読書相談 学校図書館行事 広報活動 選定・廃棄 点検・評価	年間運営計画の実施 学校図書館行事の実施 各種コンクールの実施・審査等 児童生徒図書館委員会の指導

学校図書館ボランティアの導入

●ボランティアへの期待

①「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（平成20年3月11日閣議決定）

(3) 家庭・地域との連携による読書活動の推進

「多様な経験を有する地域の人材の協力を得ていくことにより、児童生徒の読書に親しむ態度の育成や読書活動の推進に資する様々な活動を推進していくことが可能となる。このため、「ブックトーク」活動、学校図書館に関する広報活動、図書情報のデータベースの作成などの活動について、さらに地域のボランティア等の人材が十分に活動できるよう支援していく。

また、地域の図書館やボランティア等と連携して、各地域で参考となるような事例の紹介・普及を図り、地域が一体となった子どもの読書活動の推進を図っていく。」

②「これからの学校図書館の活用の在り方等について」（平成21年3月 子どもの読書サポーターズ会議）

学校図書館を活用した子どもの居場所づくり

視点⑤ 「いつでも開いている図書館、必ずだれかいる図書館」を実現し、「心の居場所」となる学校図書館づくりを進める。

・司書教諭、学校司書又はボランティアなど、大人が昼休みや放課後に常駐する体制を確立する。

●ボランティアの導入状況

平成20年度「学校図書館の現状に関する調査」（平成21年4月22日報道発表 文部科学省）

①ボランティアを活用している学校数の割合

小学校 75.5% （平成19年 64.9%）

中学校 20.4% （平成19年 18.7%）

②ボランティアの活用状況

	小学校	中学校
・読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援	73.2%	11.4%
・書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援	27.2%	9.0%
・配架や貸出・返却業務等、図書館サービスに係る支援	11.4%	6.0%

●ボランティアの募集

校長名で保護者や地域の方に「学校図書館活動協力のお願い」の文書を出すのが一般的である。ときには「読み聞かせ協力のお願い」のように内容を限定して募集することもある。

募集の文書に入れること

- ・目的
- ・活動の内容 読み聞かせ、掲示物の作成、書架の整理…など
- ・活動時間 朝 休み時間 放課後…など
- ・活動場所 図書館 多目的ルーム…など

◎留意点

打ち合わせを定期的にもち、連絡を密にする。守秘義務についてしっかり伝える。

参 考 文 献

(※価格は税込み)

●学校図書館の入門書

- ・学習に活かす情報ファイルの組織化(学校図書館入門シリーズ10) 藤田利江 全国学校図書館協議会刊 2004年 714円
- ・パスファインダーを作ろう 情報を探す道しるべ(学校図書館入門シリーズ12) 石狩管内高等学校図書館司書業務担当者研究会編 全国学校図書館協議会刊 2005年 840円
- ・学校図書館ビフォー・アフター物語—図書館活用教育の全国展開を願って 五十嵐絹子編著 国土社刊 2009年 1,995円
- ・学校図書館の活用名人になる—探究型学習にとりくもう 全国学校図書館協議会編 国土社刊 2010年 1,680円

●読書指導

- ・ブックトーク12か月 滋賀県学校図書館協議会中学校部会ブックトーク研究会編 全国学校図書館協議会刊 2004年 1,890円
- ・小学生のためのブックトーク12か月 東京都学校図書館協議会・東京都小学校図書館研究会ブックトーク研究委員会編 全国学校図書館協議会刊 2007年 1,890円
- ・読書教育 辻由美 みすず書房刊 2008年 2,520円
- ・松居直のすすめる50の絵本 松居直 教文館刊 2008年 1,365円

●情報活用指導

- ・学校図書館学びかた指導のワークシート 全国学校図書館協議会編 全国学校図書館協議会刊 2007年 1,995円
- ・学校図書館で育む情報リテラシー：すぐ実践できる小学校の情報活用スキル 堀田龍也・塩谷京子編 全国学校図書館協議会刊 2007年 1,995円
- ・新版 図書館・学びかたノート小学校中学年用 全国学校図書館協議会「図書館・学びかたノート」編集委員会編 全国学校図書館協議会刊 2008年 630円
- ・新版 図書館・学びかたノート小学校高学年用 全国学校図書館協議会「図書館・学びかたノート」編集委員会編 全国学校図書館協議会刊 2008年 630円
- ・小学校における学び方の指導 探究型学習をすすめるために(新しい教育をつくる司書教諭のしごと第Ⅱ期1) 徳田悦子 全国学校図書館協議会刊 2009年 1,470円

●学校図書館活動

- ・楽しもう!学校図書館ディスプレイ さわださちこ 全国学校図書館協議会刊 2009年 1,995円

●組織化

- ・どの本よもうかな? 中学生版:日本編 日本子どもの本研究会編 金の星社刊 2003年 2,625円
- ・えほん:子どものための300冊 日本子どもの本研究会絵本研究部編 一声社刊 2004年 2,310円
- ・学校図書館基本図書目録2010年版 全国学校図書館協議会基本図書目録編集委員会編 全国学校図書館協議会刊 2010年 5,985円

用語解説

オリエンテーション（学校図書館に関して） 児童生徒に対して学校図書館の概要、利用法、利用規則、利用上の留意点等を説明し、積極的な利用を促す活動。多くは、新年度に始めに学級担任又は学校図書館担当者が行う。

学校図書館憲章 全国学校図書館協議会が1991年に学校図書館のめざす指針として定めたもの。理念、機能、職員、資料、施設、運営の項目からなる。学校図書館はこの憲章で示された学校図書館の実現に向けて日々の経営・運営を行う。

学校図書館支援センター 学校図書館の経営・運営や学校図書館の活用方法に関する専門的な指導・助言をしたり、各学校図書館で不足する図書等を貸し出したりする支援を行う専門機関。教育センター等に置かれ、専門スタッフが従事する。

学校図書館担当職員 学校図書館資料の発注、帳簿記入、分類作業、修理・製本、経理、図書の貸出・返却の事務等、各種の学校図書館サービスを担当する職員をいう。「学校司書」とも言われ、近年では配置数が増加している。

学校図書館図書標準 文部省が平成5年に小中学校に備えるべき学校図書館蔵書冊数の目標として定めたもの。学級数に応じた冊数が示され、裏付けとなる図書費が地方財政措置されてきた。

学校図書館の開放 学校図書館法第4条第2項に基づいて、学校図書館を学校図書館の目的に支障のない限度で一般の地域住民等に利用させること。多くは土曜日、日曜日又は放課後に開館する。

学校図書館の機能 学校図書館が持つ読書センター、学習センター、情報センターの3つの機能をいう。学習・情報センターと表記されることもある。読書指導、学習指導ではこれらの機能が相互補完的に作用する。近年では教員サポートも重視されている。

学校図書館法 昭和28年に制定された法律。学校図書館の整備充実を目的にしたもので、学校図書館の定義、目的、運営、司書教諭、設置者の任務等を定める。

学校図書館ボランティア 学校の求めに応じて学校図書館の業務の一部を無償で行うボランティア。学校図書館担当者との相談、依頼等により、主として展示・掲示、図書の整理・修理、読み聞かせ等を行う。

学校図書館メディア 図書、雑誌、新聞、小冊子やパンフレットの他に、音声や静止画、動画など、学校図書館で組織化されて読書や学習に活用できるメディアをいう。

教員サポート 教員の教材研究、教材作成、資料作成等に資料・情報を提供したり、学校図書館の立場から助言したりする機能。教材研究を共に行うことも含める。

子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画 『子どもの読書活動の推進に関する法律』に基づき国が読書振興を図るために作成した計画。子どもの読書推進のために家庭、地域、学校、民間団体等が推進すべき事項を具体的にあげる。

子どもの読書サポーターズ会議 平成19年に読書活動を進め、学校図書館が効果的に活用されるためのアイデア等を検討し、提案・実践するために設けられた協議会。片山善博前鳥取県知事が座長となり、各界からの委員が活発に意見交換をし、報告書にまとめた。

司書教諭 学校図書館法第5条に基づき、大学またはその他の教育機関で行われる講習を修了し、学校図書館に関する専門的な職務を担当する教諭。教諭としての経験を積み、学校図書館に関する専

門的な知識・技能・経験を持つ学校図書館の専門家である。

情報活用能力 知識基盤社会などの情報が重要となる社会に主体的に対応できる能力や態度。文部科学省は、「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」を情報活用能力の3要素としている。

情報教育 情報活用能力の育成を目指し、教科「情報」を含む全ての教科で情報手段の活用を図り、情報を適切に判断・分析するための知識や技能を育む。

情報ファイル パンフレット、リーフレット、写真、新聞の切り抜き、地図などをフォルダー、ファイル等に入れたもの。ファイル資料と同義。

所在記号 図書等の配架された書架等を示す記号。通常は分類記号、図書記号、全集の場合には巻冊番号をラベルに書き、背表紙の下部に貼付する。請求記号ともいう。

装備 図書を学校図書館の資料として配架できるようにする作業。登録印の押印、登録番号の記載、所在記号を記したラベル・貸出期間票の貼付等がある。近年では、バーコードラベルの貼付、図書の耐久性を高めるためのフィルムの装着などもある。

組織化 図書などの資料がいつでも容易に利用できるように分類し、目録を作成し、装備をし、配架するまでの一連の作業をいう。

代本板 本を書架から取り出すときに本の代わりに置く板状のもの。配架の乱れを防いだり、貸し出し方法として利用されたりしていたが、学校図書館の利用が活発になるにつれ、弊害が顕在化したために現在ではほとんど使われていない。

電子資料 コンピュータを媒介とし、デジタル化されたデータで頒布、流通する資料。紙媒体の情報を電子化したものも含めて電子資料という。デジタル資料ともいう。

図書室 閲覧室等の部屋のことをさす。近年では、学校図書館の機能も含めた概念として「学校図書館」というようになった。小学校では複数の部屋がある場合、各部屋の機能を表す「調べ学習室」、「知識のへや」、「物語のへや」等の名前をつけることが多い。

日本十進分類法 ほとんどの公共図書館及び学校図書館で使用されている日本の標準的な分類法。NDCと略する。図書等を主題又は形式によって分類し、十進数字で表す。夏目漱石の「坊っちゃん」は、文学(9)日本語(1)小説・物語(3)で、分類記号は913となり、図書記号は著者の頭文字からナとする。

配架 図書等を所在記号の順序に書架に配列すること。書架の左端から右へ、上の段から下の段へ、右隣の書架への順に配架する。

ブックトーク 特定のテーマにそった複数の本の粗筋、登場人物、一部分の紹介等を行う一連の活動。児童生徒の読書意欲の喚起、図書の紹介を目的として行う。

別置 図書等の配架を利便性、管理上により、他の書架等に配架すること。美術全集のような大型本や文庫・新書のような小型本、絵本、貴重書などは、常時別置することが多い。新着本、特定の主題や季節、学校行事等で一定期間別置することもある。

目録 図書等の所在を確認したり、探すときに利用されるもの。カード目録では、書名目録、著者目録、件名目録などがある。近年はコンピュータ目録が多い。

レファレンス・サービス 利用者の課題を解決するため、利用者の求めに応じて図書館担当者が解決に必要な資料や情報を提供、提示すること。

学校図書館・読書活動 関連団体・機関

朝の読書推進協議会	新宿区東5軒町6-24 トーハン広報室内
親子読書地域文庫全国連絡会	横浜市瀬谷区南台2-5-6 村島方
国立国会図書館国際子ども図書館	台東区上野公園12-49
社団法人全国学校図書館協議会	文京区春日2-2-7
財団法人東京子ども図書館	中野区江原町1-19-10
社団法人読書推進運動協議会	新宿区袋町6 日本出版クラブ会館内
社団法人日本国際児童図書評議会	新宿区袋町6 日本出版クラブ会館内
日本子どもの本研究会	練馬区豊玉北4-4-18-105
日本児童図書出版協会	新宿区袋町6 日本出版会館内
社団法人日本児童文学者協会	新宿区神楽坂6-38 中島ビル502
社団法人日本児童文芸家協会	千代田区飯田橋4-16-3 金子ビル202
社団法人日本図書館協会	中央区新川1-11-14
財団法人文字・活字文化推進機構	千代田区神田神保町3-12-3 神保町スリービル8F
ヤングアダルト出版会	新宿区若松町15-6 理論社内

索引

あ

朝の会・帰りの会	5
アニメーション	20
NDC→日本十進分類法	10、37、67
親子読書	49

か

学校司書	62
学校図書館図書標準	66
学校図書館の日	8
学校図書館法	60
学習センター	10
活字離れ	3
教科学習	10、56
興味関心	6
公共図書館	7
子ども読書の日	8
『子どもの読書活動の推進に関する基本的な 計画』	61
『これからの学校図書館の活用の在り方等 について(報告)』	61

さ

司書教諭	62、66
調べ学習	25、32
推薦図書	9、44
総合的な学習の時間	12

た

団体貸出	36
ディスプレイ	25
道徳	5
読書会	21
読書感想文	16、49

読書クイズ	21
読書指導	6
読書週間	8
読書の効用	3
読書離れ	3
読書郵便	16
図書委員	29
特別活動	5

な

日本十進分類法	10、37、67
年間計画	8

は

必読図書	24、32
ブックトーク	67
ブックフェア	8
ブラックライト紙芝居	17
ホームルーム	5
ボランティア	7、64、66

ま

文字・活字文化振興法	60
文字・活字文化の日	8

や

読み聞かせ	5、52
-------	------

ら

リテラシー	4
論理力	4

学力向上のための読書活動・学校図書館活用ハンドブック

執筆者：村山 功 静岡大学大学院 教授
須永 和之 國學院大學 准教授
森田 盛行 社団法人全国学校図書館協議会 理事長
対崎 奈美子 社団法人全国学校図書館協議会 事務局長・編集部長

発行日：平成22年3月30日

本ハンドブックは文部科学省初等中等教育局の平成21年度委託事業「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」の研究成果として、国立大学法人静岡大学を中心に取りまとめたものです。

本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省初等中等教育局の承認手続きが必要です。

国立大学法人 静岡大学

